

# 「超巨大環境怪獣ゲジラ」

## 【登場人物】

研究員

オペ子

未来人 A

未来人 B

殺し屋

弁護士

助手

ゲジラ（女性）

ライバル弁護士

ロボ裁判官

暴走オペ子

リーダー（宇宙人 1）

宇宙人 2

宇宙人 3 / サポーター

「超巨大環境怪獣ゲジラ」

【現代サイド①】

場所は宇宙ステーション。舞台には研究員、オペ子。  
明転。

研究員「巨大隕石が地球に衝突するまであと3時間か……!」

オペ子「はい、古澤主任」

研究員「我々の開発したミサイルでもあの巨大隕石を完全に破壊することはできない。ミサイルで粉々になった破片群がどこまで地球に影響を及ぼすのか……ある程度のシミュレートはできているな？」

オペ子「はい。シミュレート、そして隕石迎撃ミサイルの準備はほぼ完了しております」

研究員「流石は横田君だ。頼りになるよ」

オペ子「ありがとうございます」

研究員「いや、本当にいつも頼りになるよ。……それであのくいやいつものお礼みたいなそんな意味でなんだけど、もしよかったら今夜食事でも行かない？」

オペ子「いえ、それはちよっと」

研究員「いやいや別にね！ ホント今のはそういう意味のやつではなくてね、」

オペ子「今夜はまだ隕石がどうなるか分からないので、ゆっくり食事というのは」

研究員「あー！ なるほどね！ そういう意味ね！ それじゃあ別に私と食事をするのが嫌ってことでは、ないのね？」

間

オペ子「はい」

研究員「おや？ 何か変な間があったね？ 横田君」

オペ子「いえやはり隕石のことが心配で。こういうことは、イレギュラーが付き物なので」

研究員「そうだな。しかし大丈夫。この私がこの作戦の主任なのだ。きつと被害は最小限のものとなるさ！……だからあのくもしこの作戦が無事に終了したら、お祝いに食事でも？」

未来人A「いや！！ 残念ながらその被害は甚大なものとなる……!」

未来人Aが下手から出てくる。

研究員「な、なんだと！？ あんたは一体誰だ！」

未来A「俺は今から50年後からきた、未来人だ……!」

研究員「み、未来人だと！？ 何を馬鹿げたことを！」

未来A「信じられないというならこれを見てくれ!!（資料を研究員に渡す）」

オペ子「声でけえなこいつ」

研究員「こ、この資料は……!! 我々しか知りえない極秘情報のはず……!! なぜあんたが!!」

未来A「それは俺が未来人だからだ!! そして今から3時間後、ミサイルで粉々になった隕石の破片群が地球に降り注ぎ……地球は大変な被害をうけることになるんだ!!」

研究員「そんな……!! それではこの作戦は失敗に……?（落ち込む）」

オペ子「主任……」

研究員「横田君との食事も……無し?（更に落ち込む）」

オペ子「作戦失敗より落ち込んでませんか?」

未来A「しかし安心してくれ!!」

研究員「え?」

未来A「俺はそれを阻止するために! 隕石を完全破壊するために! 未来からやってきたのだ! この遠隔プログラムを使ってな!（SDカードを取り出す）」

研究員「おお……!! 恋の救世主かあなたは……!!」

オペ子「そんな簡単に信じちゃって良いんですか?」

未来A「隕石の被害は本当に酷いものなんだ……!! 俺はただそれを食い止めたいただけなんだ!!」

研究員「あんた……。しかしそうか、地球はそんな酷い被害を受けてしまうのか……!! く

そ! 私が完璧なミサイルを開発できないばかりに……!!」

未来A「あんたのせいじゃないさ!!」

研究員「ありがとう……。しかしその破片群によって、死者も大量に出してしまうのだろうか?」

未来A「死者は……出なかったかなあ、流星に」

研究員「え? 死者は、いなかったの?」

未来A「しかし勿論大量のケガ人が出た……!!」

研究員「ああ……!! そうだろうな! そうか……!! もう、自分の足で動けない人だって……」

未来A「いやそんな重いケガの人はいなかったかなあ。主に皆、捻挫とかかな」

研究員「捻挫? 主に?」

未来A「そして被害は人だけでなく勿論建物にも及んだ!!」

研究員「ああそうか! そっちか! やはりその被害によって都市部の機能が失われたりした訳か……!!」

未来A、違う違うと手を振る。

研究員「そうか……じゃああれかな？ 一部の建物が全壊したとかかな？」

首をかしげる未来A。

研究員「……壁がぶち破られたとか？」

首をかしげる未来A。

研究員「……窓ガラスが割れたとか！？」

それだ！ と指を向ける未来A。

研究員「窓ガラス！」

未来A「その光景は例えるならば！ ドラえもんという漫画で野球をしているのび太君達が誤ってボールをかみなりさんの家に飛び込ませ窓ガラスを割る、それが何十件もの建物で起こったような、そんな感じだ！」

オペ子「しょぼくない？ 隕石の破片群の被害、しょぼくない？」

研究員「横田くーん！……まあそうですね。確かにね、確かに色んな被害があったとは思うんだけど……そこまで言う程の被害ではないのかなーっと」

未来A「お前は実際にその惨状を目の当たりにしたのか！？（すごいキレる）」

研究員「いやごめんなさいごめんなさい、そうですね。はい、軽率な発言でした」

未来A「とにかく！ 俺はそんな惨状を回避するために！ 隕石を完全に破壊しにきたんだ！」

未来人B「いや……！ その隕石の破壊……！ やめてもらおうか！」

未来人Bが下手から出てくる。

研究員・未来A「誰だ！？」

未来B「私は100年後の未来からやってきた者だ。お前らがやろうとしている隕石の完全破壊を止めるためにな……！」

研究員「今度は100年後……！ 更に未来人だ……！」

未来A「それより！ 完全破壊を止めるとはどういうことだ！？」

未来B「言葉の通りさ。お前達がこの宇宙ステーションで巨大隕石を完全破壊することで、100年後の未来、地球は更に甚大な被害を受けてしまうのだ……！」

研究員「なんだって！？」

未来B「確かに隕石を完全に破壊することで破片群による被害はなくなる。しかしそのせい

で！ 本来ならばその破片群で破壊されていたもの……破壊されなければならぬ  
い、やつの種も無事だったのだ！」

研究員「やつ？」

未来B「そして無事だったやつの種は時間をかけ静かに成長し、とうとう我々の住む100  
年後の未来でその姿を現し！ 世界に甚大な被害を与えたのだ！」

研究員「そいつは一体なんなんだ！」

未来B「そいつは……！ 我々人類の敵であるそいつの名前は……超巨大環境怪獣！ ゲ  
ジーラ（めっちゃ発音よく）！」

研究員「うん？ うん？ うん？ ごめんなさい、急にちょっと聞き取れなかったんですけ  
ど、なんて？」

未来B「だから、超巨大環境怪獣、ゲジーラ（めっちゃ発音よく）！」

研究員「うーん？ なんだー？ もうちょっとだけ、強調するの抑えて頂けます？」

未来B「だから、ゲジーラだ」

研究員「ホントにそう言ってた？ え？ ゲジラ？」

オペ子「いやゲジラって……どう考えてもゴジラのパクりでは？」

研究員「そうね……」

未来B「……ゴジラ？（首をかしげる）」

研究員「嘘つけ！」

未来B「知ってる？（未来Aに聞く）」

未来A「さあ？」

研究員「いや嘘つけ！ そんな50年100年でなくなってたまるか！」

未来B「とにかく……！ 私はゲジラの誕生を阻止するために、隕石の完全破壊を止める！」

未来A「違う！ 隕石の被害を止めるために完全破壊するんだ！」

研究員「うーん……まあまあでも、話を聞く限りでは……隕石の完全破壊をやめた方が良く  
んじゃないの？」

未来A「なぜだ！？」

研究員「いやだってその被害がねー……絶対ゲジラの方が大きいと思うんだよねえ……」

未来B「その通りだ。ゲジラ、その大きさは100メートルにも及ぶ大怪獣だ……！」

研究員「ほらあ」

未来B「その超巨大から吐き出されるプレスによって、未来の人々は大量に……！ 鼻水を  
流すことになった……！」

研究員「うん？」

未来B「それだけではない！ 目はかゆくなり真っ赤に充血し、涙を流す者さえいた！」

研究員「花粉症の話だっけ？」

未来B「そして！ ゲジラが荒野を歩けば枯れた大地には木々や花々が咲き乱れ、鳥や蝶々  
が羽ばたき始めた！」

研究員 「どんな怪獣だよ！ めっちゃ環境に優しそうじゃん！」

オペ子 「こっちの方も被害大したことなさそうですね」

未来B 「……お前は実際にその目で惨状を目の当たりにしたのか！？（すごいキレる）」

研究員 「出た出た！ お前からそれ言えば済むと思うなよ！」

未来B 「とにかく私はゲジラの誕生を止める！ 未来の人々のために！」

殺し屋 「……待て」

殺し屋が下手から出てくる。

研究員 「また新しい人！ 何？ あなたも未来から？」

殺し屋 「そうだ」

研究員 「今度はこの人（未来B）を止めには？」

殺し屋 「俺は……お前（研究員）を殺す。（銃を取り出し研究員に向ける）」

研究員 「えー！？ 何それ急に！？」

暗転→OP映像へ。

【未来サイド①】

未来の法律事務所。舞台には弁護士と助手。  
明転。助手がタブレットでニュースを読んでいる。

助手「まーたタイムマシンで時空犯罪だつてさ、姉さん」

弁護士「何です？ また過去の改編ですか？」

助手「そうそう。やることは同じだねー。タイムマシンが開発された30年前からやっ  
てる犯罪は変わらないよ」

弁護士「過去の改編なんていくらやってもキリがないというのに……まったく、碌なもんじ  
ゃありませんよ」

助手「でも一回くらいそういう時空犯罪絡みの弁護もやってみたいよねー」

弁護士「はー無理です無理です。あんなややこしい犯罪の弁護なんて絶対やりたくありませ  
んね。私には無理ですよ」

助手「はあ……姉さんはもっと自分に自信持ちなよ。優秀な弁護士なんだから」

弁護士「いやいやいや……もっとください」

助手「なんだこの人」

『ピーン』と（未来っぽいインターホンの）音がする。

弁護士「おや？ 本日依頼人が来る予定はありましたか？ 憲さん」

助手「いや、なかったはずだけど」

助手、下手に行き扉を開ける。女性が事務所に入ってくる。

女性「すみません、急にお尋ねしてしまいました」

助手「いえいえ。本日は何か、急なご相談でしょうか？」

女性「はい、その通りです……！ お話を聞いてもらえないでしょうか？」

助手「姉さん」

弁護士「ええ。……ちょっと急なご依頼は受けておりませんので、お帰りに、」

助手「（弁護士を上手端に連れて行く）ちよちよ姉さん！ なんでよ！？ 話くらい

聞いてあげようよ！」

弁護士「いやいやいや！ 急な相談なんて、絶対面倒くさい内容ですよ！ 私では無理で  
す！」

女性「やはり、難しいでしょうか……？」

助手「いえいえいえ！ 大丈夫ですよ！」

弁護士「えー……」

助手「どうぞこちらにおかけになってくださいな！」

女性「ありがとうございます」

助手が女性をソファ（椅子）に案内する。助手、弁護士もその対面に促す。しぶしぶそこに座る弁護士。

弁護士「えー……私が当法律事務所の代表、國部です。それで、急なご相談というのは？」

女性「はい……私今ある環境団体さんと折り合いが悪く、とうとう今朝訴えられてしまい

まして、住んでいる所からの立ち退きを要求されてしまったんです……」

弁護士「立ち退きですが……あつとすみません、お名前を聞いても……？」

女性「あ、まだ名乗っていませんでしたね！ すみません、気が動転しております……  
……！」

助手「まあ訴えられたばかりですもんね。冷静でいられる人の方が少ないですよ」

女性（以下ゲジラ）「私の名前は、ゲジラと申します」

間

弁護士・助手「は？」

ゲジラ「あ、すみません！ 正確にはゲジラ（めっちゃ良い発音）なんですけど」

助手「いやあの発音の問題とかではなくてですね！」

弁護士「え？ゲジラ、さん？」

ゲジラ「はい、ゲジラです」

弁護士「……あの、少し前に出現した巨大怪獣と同じお名前、なんですか……？」

ゲジラ「あの、ですので、私がその……超巨大環境怪獣の、ゲジラです」

弁護士・助手「はあ!？」

ゲジラ「すみません、驚かれるのも無理ないですよ。勿論この私が本体ではなく、本体の怪獣の方は周りが海の孤島でひっそりとしております。この私は、本体の分け身みたいなものですね。意識や考え等は本体と共有していますが」

弁護士「え？ 冗談、ですよね？」

助手「任せて姉さん！（タブレットを示し）すみません依頼人との会話は記録のために全部録音してあります！ 後は今録った会話をこの中に入ってる感情測定器で分析すれば（タブレットを叩く）……嘘を付いてるかなんて一発で、」

音声『測定結果、本当です』

助手「本物のゲジラだああああ……！」

弁護士「テンション大丈夫ですか？ しかし本物、でしたか……」



助手 「うおおおおお!!! すごええええ!!!」

弁護士 「え? というか憲さんそんなにゲジラ、さんのこと好きでしたっけ?」

助手 「いや男だったら誰でも怪獣には憧れるよお!」

ゲジラ 「いやあ……なんかすみません、私なんかに」

助手 「すごい恐縮してるう! 超巨大怪獣なのに! 握手! 握手してください!」

ゲジラ 「は、はい。(助手と握手する)」

助手 「うわあああ!……手が冷たい!」

ゲジラ 「すみません、冷え性なんです」

助手 「冷え性! ゲジラ冷え性! 超巨大怪獣なのに! あ、だったら今すぐ熱いお茶でも入れてきますね!」

ゲジラ 「あ、すみませんちよっと熱いお茶は」

助手 「ああ! そうですよね! 怪獣ですもんね! お茶とか人間の飲み物は飲めませんよね!」

ゲジラ 「猫舌なだけです」

助手 「猫舌! ゲジラ猫舌! 超巨大怪獣なのに!」

弁護士 「憲さん、それくらいにしなさい。すみませんうちの愚弟が失礼を」

ゲジラ 「あ、お気になさらずに。他の人間の方にもよく言われますので。ゲジラさんはなんかすごい庶民的ですねえ、って」

弁護士 「そうですね……けっこうそのお体でお出かけされるのですか?」

ゲジラ 「ああはい、時々町等に。一応環境怪獣なので、自然のこととかでお役に立たせてもらってます。私、人とお話したり接するのが好きなんです」

助手 「へー。そう言ってもらえるのはなんだか嬉しいですね」

ゲジラ 「恐縮です。ですが……勿論私を受け入れてくれない人も大勢います。ご存知かもしれませんが、花粉症みたいなやつですね」

助手 「あの、花粉症みたいなやつですね」

ゲジラ 「それでも害は害です。私はそれが分からず、一度多くの人間に害を与えてしまったので……。勿論今は害を及ぼさないように孤島で暮らしていますし、この人間体ではそんなことないのですが……そもそも、怪獣であるということで警戒されてしまっているのです」

助手 「ゲジラさん……」

ゲジラ 「私としてはこのまま人間の皆さんと一緒に生活を続けたいのですが、やはりそれを望むのは……難しいことなのでしょうか?」

弁護士 「ゲジラさん……仰る通り難しいので、やはりお帰りください」

助手 「(弁護士を端に連れていく) おーい! 姉さん! 鬼かあんだ!」

ゲジラ 「やはりそうですね……怪獣は怪獣らしく人々が安心できる場所、海の底等でひっそりと生きていきます……」

助手「ゲジラさんちょっと待ってください」

弁護士「いえお帰りになった方が良いです。その程度の覚悟でしたらね」

ゲジラ「……え？」

弁護士「お話を聞く限り、あなたは少し優しすぎます。そのような心持ちでは、裁判に勝つことは到底不可能でしょう。あなたは例え相手を傷つけてでも自身の自由を勝ち取ろうとする覚悟は、お有りですか？」

ゲジラ「そのような覚悟は……ありませんでした」

弁護士「あなたにその覚悟がなければ、私も協力はできません。他をあたってください」

ゲジラ「ですが……！ これからも人間と共に生きたいという気持ちは本物です！」

弁護士「あなたを訴えたのもその人間です。相手は容赦なくあなたの心を抉ってきますよ？」  
ゲジラ「それは想像しただけでも、ツライです。しかしそれでも！ この裁判が私のことを社会で認めてもらうきっかけになるのであれば、私は絶対に最後まで戦い抜きます。……ですから私の弁護を、引き受けて頂けないでしょうか？」

弁護士「……そこまで言うのでしたら、私も協力しましょう」

助手「姉さん！」

ゲジラ「ありがとうございます……！……あなたのおかげで、決心ができました。初めは、怪獣の私では裁判なんて絶対に勝てない、こんな前例もない裁判絶対に勝てない、とにかくこんな難しい裁判に絶対に勝てる訳ない、と弱気でしたが……あなたのおかげで、」

弁護士「……(→の台詞でどんどん不安な表情になり)やっぱり無理かもしれない私じゃあ〜」

助手「姉さん！」

ゲジラ「え！？」

弁護士「やはりこんな前例も判例もない難しい裁判、私では到底無理ではないのか〜」

助手「大丈夫！ 姉さんなら絶対勝てるよ！ ほら、ゲジラさんも！」

ゲジラ「え！？ こ、國部さんなら、大丈夫ですよ、はい」

弁護士「もつと大きな声で勇気づけてください！」

助手「なんで偉そうなのこの人！？」

弁護士に声をかけながら徐々に弱明していく。助手にスポットライト。

助手「その後僕たちは何とか姉さんを鼓舞し、ゲジラさんの弁護を正式に引き受けました。

そして、初弁論の日がやってきました」

→の台詞中で舞台を裁判所に移す。明転。

弁護士「さて、いよいよ初弁論ですが……ゲジラさん大丈夫です。緊張しないでくださいね

(足ががくがくしている)

ゲジラ 「いや國部さんの方がしてませんか？大丈夫ですか？」

弁護士 「ただ大丈夫でしゅ」

ゲジラ 「どもってるし嘔んだ！」

ライバル弁護士 「ふふふ……また何やら滑稽なことをやられているようで」

ライバル弁護士・未来人B・サポーターの3人が現れる。

助手 「げっ……やっぱり相手の弁護士こいつかよ……」

弁護士 「ほほほ本日はよろしくお願ひします、荒原弁護士」

弁護士、握手しようと手を出すが、その手にゴミを乗せ弁護士の手を閉じるライ弁。

ライ弁 「(わざとらしく)……こここちらこそよろしくお願ひ致します、國部弁護士」

未来B 「私はお前(ゲジラ)の存在を認めない……！ 絶対にお前をこの国から、いや世界から追放してやる……！」

サポ 「お二人とも頑張ってください！くでは私は傍聴席にて」

ライ弁、未来Bは反対側の原告席へ移動し、サポははける。

助手 「相変わらずムカつく野郎だなー……！」

弁護士 「憲さん、あちらの男性(未来B)が反ゲジラ団体の代表でしょうか？」

助手 「そうだよ。神山さん40歳、既婚者で娘が1人。その子はゲジラさんの息を吸ってしまった被害者の1人みただね。それで隣にいた女性は彼の右腕みたいな人かな。団体に入ったのは最近なのに妙に神山さんから信頼されてるみたい。不倫かな」  
弁護士 「滅多なことを言っははいけませんよ。さて資料の最終確認をしたいのですが、憲さん」

弁護士、震える手で資料を掴む。

弁護士 「憲さん。この資料、震えてますけど？」

ゲジラ 「いやあなたの手ですよ！？ さつきから大丈夫この人？」

助手 「まあ姉さんの緊張具合を見てたら心配するのも無理ないですよね」

ゲジラ 「あ、いやすみません、思わず……」

助手 「でも安心してください。姉さん法廷に立つと、」

ロボ裁判官 「静粛に、静粛に」

ロボ裁判官（以下裁判官）が出てくる。少しざわつく両サイド。

裁判官「静粛に！」

助手「あの独特な雰囲気、まさか……」

裁判官「本日の裁判はワタクシ、デルタ型ヤマダ32号が判事を務めさせて頂きます」

助手「やっぱりロボ裁判官かー……！」

弁護士「とうとう我々にもきましたね……！」

ゲジラ「えつと……？ ロボット……？」

助手「そう、ロボットの裁判官。より公平な判決を下せるように最近政府が導入した制度さ」

未来B「噂には聞いていたが……ロボか」

ライ弁「今や宇宙人との交流も一部では行われている時代です。そのために宇宙人に対する法律もできましたし、裁判のあり方も常に変化しているのですよ」

裁判官「双方、ロボが判事を務める裁判は初めてのようですね。知っての通りワタクシは人間の間に感情を表に出したり、感情に動かされることはありません。それゆえ、感情に訴えかけるような行動は無意味なので、一切行わないように」

ライ弁「承知しました。しかし初めてロボットの判事をお目にしましたが……なんともカッ  
コいい、容姿ですね」

裁判官「……ありがとう（照れる）」

助手「おっとお？ 早くも感情が表に出てませんか？」

裁判官「被告弁護士、それ以上は法廷侮辱罪としますよ」

助手「すみません……でも法廷の侮辱ではなくない？」

裁判官「それでは早速始めましょう。まずは、原告側の主張から」

ライ弁「裁判長、原告は人々の心の健康・安心と安全を守るために被告ゲジラ氏の完全な立ち退きを求める訴えを、そして今後は研究施設で完全管理されることを要求します」

助手「はあ？ 研究施設って！」

ライ弁「ゲジラ氏はその巨体から吐き出す息により大量の人間を害しております。現在は人々の害にならない所で暮らしているようですが、その近くで暮らす人々はまたいつその被害を与えにくるのか不安でたまらないのです」

助手「ふざけんな！ そもそもゲジラさんに人間への敵意はありません！」

ライ弁「敵意がない……本当にその言葉を信用しても良いのでしょうか？」

助手「どういことだよ？」

ライ弁「今はあのように人間の姿に擬態していますが、怪獣ゲジラの実物はこうです（怪獣体のゲジラの映像をスクリーンに映す。大口を開けたためっちゃ恐ろしい一枚）。恐

ろしいでしよう？」

ゲジラ「あれは……！ めっちゃ眠くて大あくびしている写真……！」

助手「紛らわしいな！」

裁判官「(映像を見て) こわあ……！」

助手「いやあなたやっぱり感情表に出ていますよね？」

裁判官「それ以上は法廷侮辱罪としますよ」

助手「すみません……なんかずるいなあれ」

ライ弁「この写真だけでもゲジラの恐ろしさはよく分かります。つまりこんな怪獣がいくら人語を介せるとしても、その実何を考えているのか分かったものではないのです！ その周囲で暮らす人々が安心して夜眠ることなど決してできません！ 皆さんは、あなたを食べませんと書かれた紙がただ体に貼ってあるだけのライオンの隣で眠れますか？」

裁判官「無理無理」

ライ弁「普通の神経を持つ人間ならできませんよ」

裁判官「ロボットでも無理」

ライ弁「私ならあの隣(弁護士の横)に立つことだって、お断りですね」

裁判官「はえ」

助手「うるせえなロボ！ 寧ろ普通の判事より感情多めだよ！」

裁判官「それ以上は法廷侮辱罪としますよ！」

助手「もういいよそれ！ 便利だな！」

ゲジラ「あの人……」

助手「え？」

ゲジラ「あの人めっちゃ言うてるー！ 心折れそうなんだけどー！ 何今の？ 悪口の

世界選手権かい？」

助手「落ち着いてゲジラさん！ ここで取り乱したら相手の思うつぼです！」

ゲジラ「もう帰りたい……」

助手「大丈夫です。さっきの続きですけどね」

裁判官「次は、被告側の主張を」

助手「法廷に立つ姉さんは、頼りになるから」

弁護士「(雰囲気が変わる)……裁判長！ 今回の訴えは原告側の完全なるお門違いとしか

言えませんか！」

裁判官「何？」

弁護士「近くにいるだけで心の健康が害される？ 言葉を喋るのにそれを信じることで

きない？ ゲジラさんが心の無い怪獣だから？ そんなことはありません！

本当に心の無い怪獣だったら、素直に裁判で戦おうとするでしょうか？」

裁判官「しないなあ」

弁護士「この場にゲジラさん、いえ！ 彼女がいることは！ きちんとした感情で動いている証拠です！ 私は記録のために事務所での会話を全て録音させて頂いておりますが、それを聞けば如何に彼女が人間味溢れる人物であるかが分かりますよ！ 証拠として提出しても構いません！ (SDカードを取り出す) 因みにゲジラさん、猫舌、熱いものが苦手なようです」

裁判官「分かる〜」

助手「分かるの！？ ロボなのに！？ その辺のリアルさいる？」

弁護士「皆さん良いですか？ 彼女の思考は、我々人間と同じなのです！ 何も恐れることはありません！ 私は、あなたを食べませんと人の言葉で話してくれる女性の隣で、一緒に寝られますよ。その女性が同性愛者なら、少し困ってしまいますがね」

ライ弁「ふん……」

ゲジラ「國部さん……ありがとうございます……」

弁護士「(めっちゃ震えながら) いいいいいいいいえ、そそそんなそんな……」

助手「姉さん、戻った後は反動でこうなっちゃうんです」

ゲジラ「そうですね……！ お疲れ様でした……」

裁判官「さて、双方の主張は分かりました。それでは今の主張を充分に考慮し、今回の結論を出すようにしましょう」

助手「え？ 初弁論でもう判決が……？」

裁判官「ワタクシのスーパーコンピューターから導き出された結論は……」

間

裁判官「次回の裁判に持ち越し！」

助手「それ溜めて言う必要ありました？」

暗転。

【宇宙人サイド①】

場所は宇宙船。明転。

舞台には宇宙人1（リーダー）、宇宙人2、宇宙人3の3人。厳格な空気。

リーダー「（厳格に）これより……地球侵略作戦の、会議を始める……！」

宇宙3「よつつつしや……い……！」

間

リーダー「そのテンションは違うな」

宇宙3「え！？」

リーダー「けっこう厳格な雰囲気だったろうが今。大事な会議なのだ。ふざけたテンションはやめろ」

宇宙3「すみませんでした……！」

リーダー「あと声でかいなお前。もう少し抑えろ」

宇宙3「はい……！」

リーダー「……まあ良い。知つての通り、我々は母星より地球の侵略を任されている。しかし地球の優れた環境を手に入れるために、その環境を壊してはならない。地球の環境を守りつつ人間達を侵略しなければならぬのだ」

宇宙3「リーダー！ならばこのような策はどうでしょうか？」

リーダー「ほう、何だ？」

宇宙3「地球に、巨大隕石をぶち込むのです！」

リーダー「話聞いてた？」

宇宙3「いえ勿論！地球が木端みじんにならない程度のお手頃サイズの隕石ですよ！」

リーダー「いや大きさの問題とかじゃないから！しかも何？お手頃サイズの隕石って。どうやってみつけるの？」

宇宙3「俺、隕石集めるの趣味なんで！特別に俺のコレクションから1つ、使ってください

——い——

リーダー「……うん、うんうん。俺はね、部下であるキミの良いところもたくさん知っている。

例えば、うん……声が、大きいところとかね、うん。だからね、今回のこの地球侵略という重要な任務にね、部下として派遣されるキミ達の名前を見たとき、ああ彼女（宇宙2）、トモ子君はとても優秀な人物だからこの人選にも納得だなあと思っ  
たし、ああキミ（宇宙3）、ラエル君はねえ、うん、あいつだよなあと思うた  
訳で、うん……なんで選ばれたんだろうね？キミね？」

宇宙3「うーん……コネですかね！」

リーダー「コネかあ。まあキミの父親、母星でめっちゃ偉い人だもんねえ」

宇宙3「はい！！」

リーダー「じゃあラエル君はとりあえず……会議室から出て、好きなことをしていなさい」  
宇宙3「はい！！」

宇宙3、はける。

リーダー「……地球侵略の会議を続ける。我々は地球人と比べ高レベルの科学力を持っている。しかし我々は地球人と違い野蠻ではない。非戦闘主義だ。暴力的行動は倫理思考が邪魔をし、とることが難しい。そこで、まずはこの科学力を地球人たちの前で披露し、初めに戦意を削いでしまおうと考えている。が！これは母星にとっても重要な任務！必要であれば1人や2人、いや……数十人の人間には我々の科学力の犠牲になってもらうかもしれない。少々残酷な作戦かもしれないが、俺は鬼になる覚悟だ……！！」

宇宙2「リーダーその作戦くソですね〜」

リーダー「え？ お前今……なんて言った？」

宇宙2「いえその作戦くゴミクソですね〜と」

リーダー「もっと酷くなってるない？」

宇宙2「しかしですね〜その作戦、生ぬるいですよ〜本当に侵略する気あります〜？ 遊びならよそでやってください〜」

リーダー「そこまで言う？ 俺一応リーダーなんだけど」

宇宙2「そもそも他の星の生物のことなんて気にする必要ないんですよ〜。リーダーは虫けらのことをいちいち気にしませんよね〜？ 地球人と虫けらの違いなんて排泄をトイレでするかどうかくらいですよ〜」

リーダー「中々酷いこと言うなお前……」

宇宙2「非情になりましょうよう。環境は守りつつ、抵抗しようがしまいが地球人のみを徹底的に排除する、作戦はそういう方向性でいきましょう〜」

リーダー「えげつないなお前……。まあしかし……確かに1つの星を侵略するためには、それくらい残酷にならなければいけないのかもしれない……！！」

宇宙2「はい〜」

リーダー「……よし分かった！ ではその方向で考え、」

宇宙3「リーダー！ 作戦の方向性が決まったようですね！」

宇宙3が入ってくる。

リーダー「え？ そうだが、よく分かったな」



宇宙3 「リーダー！ 実は俺、馬鹿じゃないんです！」

リーダー 「その発言がちよっと馬鹿っぽいけどな」

宇宙3 「そして！ 会議にいらなくてもどのような作戦になるかは予想できたんで、今は外でその準備をしていたんです！」

リーダー 「ええ？ なんだお前、本当にやればできる奴じゃないか。一体どんな準備を？」

宇宙3 「地球に、隕石をぶち込む準備です！」

リーダー 「馬鹿じゃねえかやっぱり！ さっきそれは違うって言っただろうが！」

宇宙3 「え！？ いや違うとは言っていないですよ！」

宇宙2 「確かに〜はつきり違うとは言ってなかったですね〜」

リーダー 「いやいや話の雰囲気に分かるだろう、そんなの。というかトモ子君はどっちの味方なんだ！」

宇宙2 「それは勿論、ラエル君ですよ〜」

リーダー 「なんでだよ！」

宇宙2 「私達お付き合いしてるんで〜」

リーダー 「そうなの！？」

宇宙3 「俺たち、付き合ってます！！」

リーダー 「何それ！？ ええ？ ちよっと……いつからよ？ ええ？ 俺全然気づかなかつたよ。でもあれだね、こういうのはちよっと、嬉しいね……じゃない！ 職場恋愛をちゃんと祝福できる優しい上司……じゃない！ いや俺もちゃんと祝福はしたいよ？ だけど公私混同しては駄目だよ。だって今のは完全にこっちの言い分が正しいからね。巨大隕石を地球に放つなんて駄目に決まっているだろう！」

宇宙3 「えー！？」

リーダー 「えーじゃないよ」

宇宙3 「いやでも……もうすぐ隕石、放たれますよ、地球に」

リーダー 「……はあ？」

音声 『3……2……1……バシユウ！！』

宇宙3 「(敬礼しながら) 発射完了」

リーダー 「はあ！？ 何勝手にやっつてんだよ！」

宇宙3 「でもさっき準備してたって言ったじゃないですかー！」

宇宙2 「言ってた言ってた〜」

リーダー 「いやもうホントお前何やってんの！？」

宇宙2 「その隕石ってどれくらいの大きさ〜？」

宇宙3 「これが地球だとすると、これくらい！ (リーダーの顔を地球、自分の手で隕石を表現する)」

宇宙2 「(宇宙3の手をリーダーの顔にぶつける) ドーン」

リーダー 「ドーンじゃねえよ！ あーもうこのままだと地球が隕石で破壊されてしまっー！」

宇宙2「まあまあ。地球の科学力でもこれくらいの隕石（手で表現する）だったらなんと  
かしますって〜」

わちやわちやするリーダー。徐々に暗転していく。

【現代サイド②】

場所は宇宙ステーション。現代サイド①の続き。明転。

殺し屋「俺は……お前（研究員）を殺す。（銃を取り出し研究員に向ける）」

研究員「えー！？ 何それ急に！？ 今までの流れ無視かい！」

殺し屋「そして、お前（未来B）も止める。ゲジラは必ず誕生させる」

研究員「おお……結局そっちもかい」

殺し屋「しかしまずはお前（研究員）から消えてもらおう」

未来A「ひいー！ 超こえー！ なんで殺し屋みたいなのまでいるんだー！」

研究員「お、落ち着け！ まずは冷静に話し合おう！」

音声『ビー！ ビー！ 隕石が範囲Bを突破しました！』

研究員「ひ、一先ず隕石を何とかさせてくれ！ 私でなければ隕石の対処はできない！

な？ 横田君？ な？（目配せする）」

オペ子「こっちは私1人でも全然何とかできます」

研究員「……だつてさ」

殺し屋「ではお前（オペ子）はそこで作業をしている、っとその前に。ゲジラを誕生させる

ためには隕石を完全に破壊しなければならなかったな。そのためのプログラムを

お前（未来A）に銃を向ける、持っている、」

未来A「ひいー！ 銃がー！」

殺し屋「撃つ気はない。お前の持つデータを、」

未来A「ひいー！ 向 けないでー！」

殺し屋「だからそのデータをあいつに渡せば、」

未来A「ひいー！」

殺し屋「あの誰か取りにいつてあげて、データを」

未来B、未来Aからプログラムを受け取る。

殺し屋「よし。ではそれをあいつ（オペ子）に渡せ」

未来B「……馬鹿め」

殺し屋「何？」

未来B「私はゲジラの誕生を阻止するために来たのだ！ こんなもの使わせるか！」

殺し屋「貴様……！ ならばお前から消してやるぞ！（銃を未来Bに向ける）」

未来B、未来Aを盾にする。

未来A 「いやー！」

殺し屋 「そいつを盾にするな！うるさいから！」

未来A 「いやー！ やめてー！」

殺し屋 「黙らないとお前も撃つぞ！」

未来A 「あああ……無理だー！ 黙れねえ！ 故に撃たれるー！」

殺し屋 「なんだお前？（銃を下に向けて）……ほら、今銃下げるから」

未来A 「（殺し屋を見て）……意外と小顔ー！」

殺し屋 「やかましいわ」

研究員 「……横田君」

オペ子 「はい主任。大分場が混沌としていますね」

研究員 「いやそうではなく……さっきあやふやになった食事の件、結局どうかな？」

オペ子 「主任？ このタイミングで？」

研究員 「ずっともやもやしちやって」

殺し屋 「お前らもさつきからこそこそと目障りだ。大方作戦会議でもしていたのだろうか」

オペ子 「いや全然違います」

研究員 「もっと大事な話だ！」

オペ子 「主任ちよっと黙っててください」

殺し屋 「こちらの邪魔をする気なら、やはりお前から先に消してやろう」

研究員 「くっ……！」

殺し屋 「お前を消す、今すぐ消してやるぞお。……そして！ ゲジラ誕生を邪魔するお前も、

消す（未来Bに銃を向ける）

未来B 「くっ……！」

未来A 「ひいー！」

殺し屋 「2人とも……今すぐ消してやるぞお……！」

研究員・未来B 「くっ……！」

殺し屋 「今すぐ、ということがどういうことか、分かっているかあ？ 今という言葉にすぐ

という言葉がついているからもう本当に、今この瞬間にすぐだよってことだから

なあ……！ お前らを今すぐ消すぞお……！……今すぐ、という語源は、

オペ子 「全然消しにこねえなこいつ！」

研究員 「横田君！」

殺し屋 「何！？」

研究員 「やめなさい！ 下手に刺激しては駄目だ！」

オペ子 「いやしかし主任、こいつ口だけで全然動かないですよ」

未来B 「それは確かに……！ お前本当に我々を消す気があるのか！？」

殺し屋 「……消す気はある」

オペ子 「ではまさか……人に向けて銃を撃つことに抵抗感があるとか？」

研究員「なんでだよ。こんな殺し屋みたいな人が、」

殺し屋「いやいやいやいやはあ？ いやいやいやいや、はあ？ いやいやいやいや……はあ？……無いし、抵抗感とか」

間

研究員「あるぞこいつ抵抗感！ 人を撃つことに！」

未来B「なるほどただのチキン野郎だったということか。ならばもう恐れることはない！

(殺し屋に構える)」

殺し屋「この俺に襲いかかろうというのか……？ やめた方が良い……追い詰められた者は何をするか分からないからな」

間

研究員「あ、それ自分のこと？ 自分のこと追い詰められてるって言っちゃってるじゃん！

やっぱりこいつただのチキン野郎だ！」

未来B、じりじりと殺し屋に近づく。

殺し屋「や、やめろ！ 来るな！ それ以上近づいたら撃つぞ！ 本当に撃つぞ！ 俺だっ

て本当は撃ちたくない！ しかしこれは自分を守るために仕方ないやつ！ 本当

マジで撃つから、」

オペ子「はよ撃てや」

オペ子、殺し屋の後ろから銃の引き金を引く。未来Bの体に電流が流れる。

未来B「ぐわあああああ……！！！」

研究員「横田くん！？」

オペ子「すみません、余りにもじれったかったので思わず」

そのまま倒れる未来B。

未来A「ひいー！」

殺し屋「う、撃ちちゃった……！ 人を撃ちちゃった！ 俺は悪くない……！ 俺は悪くな

い……！ 俺は悪くない……！ (ずっとぶつぶつ言っている)」

研究員「ほらーもうすごい自責の念に駆られてるよーこの人」

オペ子「大丈夫ですよ。どうせこんな人が持つてる武器です。あの銃もただの弱めのスタンガンとかですよ」

研究員「まあ確かに」

未来A「今の電撃……この銃は、超圧縮粒子型電撃銃だ！」

研究員「なんて！？　なんか急に未来っばいやつ出てきた！」

未来A「空気中にある静電気を銃内のエネルギーと融合、更にそれを粒子レベルまで圧縮し、高圧電流を自動追尾で放つことができる電撃銃だ！」

研究員「効果もかなり危なそうなやつじゃんそれ！　じゃあ何？　そんなヤバそうな電撃を受けたこいつの体はもう……？」

未来A「（頷きながら）お察しの通り……この男の体は、高圧電流によりすっかりほぐされた結果、血液の流れがとてよくなり、」

研究員「うん？」

未来A「肩こりとは無縁の体となった！」

研究員「ただの電気マッサージ銃じゃねえか！」

オペ子「やっぱり効果は優しかったですね」

研究員「じゃあなんでこいつ（殺し屋）はこんなに落ち込んでるんだよ！」

殺し屋「馬鹿者！　少しの間とはいえその衝撃で気を失うのだぞ！　なんて危険な兵器だ……！」

研究員「ホントあなた殺すとか言葉使わない方が良いよ絶対。絵本とか描きな」

殺し屋「しかし俺はこれを人に向けて使用してしまった……！」

未来A「半分以上この人（オペ子）のせいだけだね！」

殺し屋「くそお！　こんなもの！　もう俺は持っていたくもない！」

殺し屋、銃を投げ捨てる。その銃を拾うオペ子。『テッテレ』という（アイテムを入手した時の）SE。そしてすぐに殺し屋へ銃を撃つオペ子。

殺し屋「ぐわあああ！！！」

研究員「何のためらいもなく撃ちおった！　しかしそんなところも素敵だ！」

しかし倒れない殺し屋。

殺し屋「くっ……！！　なんて野蛮な奴らなんだ……！」

研究員「効いていない……？」

殺し屋「馬鹿め……！！　この服は電撃防護スーツなのだ……！」

研究員「なるほど……準備は万端って訳か」

しかし更に殺し屋へ銃を撃つオペ子。

殺し屋「ぐわあああ！！！！」

研究員「なんで！？」

殺し屋「貴様……！！ いくら防護スーツでも衝撃は少しあるんだ、」

更に殺し屋へ銃を撃つオペ子。

殺し屋「ぐわあああ！！！！」

研究員「横田君！？」

未来A「もうやめてあげてー！！」

殺し屋「いい加減にしろ！！」

オペ子、更に殺し屋へ銃を撃とうとするがエネルギー切れで撃てない。

殺し屋「ようやくエネルギーが切れたか……！！ 女よ……！！ 今までの所業……！！ 流石

にこの俺も少しキレてしまったよ……！！ 良いか馬鹿ども？ 非暴力的なのと……

…戦闘力が低いというのは……イコールではないのだぞ……！！」

研究員「何！？」

殺し屋「お前ら……ボコボコにしてやるよお！！」

殺し屋、威圧感を出して構えるが、めっちゃへっぴり腰。

研究員「めっちゃへっぴり腰だこの人！！」

オペ子「やっぱり喧嘩とかできないなこの人」

研究員「……とは言えこんな殴り合いを女性に任せる訳にもいかんな。横田君、あとは私に任せたまえ」

研究員、ずんずんと殺し屋に近づき喧嘩の構えをとるがめっちゃへっぴり腰。

オペ子「主任も全く同じ腰構えだ。さてはあいつも喧嘩できないな」

研究員「研究研究で喧嘩など初めてだが……負ける気がしねえなあ！！」

殺し屋「それは俺の台詞だあ！！」

研究員と殺し屋のぐだぐだしたバトルが始まる。口だけはすごいヤンキーみたいな威勢が良いが動きが伴っていない（殴ったり蹴ったりがすごいぐだぐだする）。

未来A 「殴り合いの現場なんて初めてだぜえ！」

殺し屋 「タイムン上等！ すてごろ上等！ ヒョってんじゃねえぞお！」

研究員 「しゃばいしゃばい！ このシャバ造がよお！」

未来A 「これがあ！ 頂上決戦かあ！？」

2人でぐだぐだしている中、オペ子が急に立ち上がり、2人に近づき殺し屋に飛び蹴りする。そして研究員の前で立ち止まるが研究員にもビンタをする。

研究員 「なんで！？」

更に未来Aにもビンタをする。

未来A 「なんで！？」

更にタイミングよく目が覚めた未来Bにもビンタをする。

未来B 「なんで！？」

そしてオペ子はロープを取り出し、殺し屋をロープで縛りあげる。それをただただ見てる研究員達。

未来B 「なあ……なんかめっちゃ肩こりがとれてる」

研究員 「そう……」

オペ子 「終わりましたよ、主任」

研究員 「流石は……横田君だ。さて、あなたには色々聞きたいことがある。私の質問に答えてもらおうか」

殺し屋 「はっはっは。答えると言われ、はいそうですかと素直に喋るとでも、」

オペ子、殺し屋にビンタをする。

殺し屋 「聞きたいことはなんだ？」

研究員 「なにシンプルな質問だ。なぜ、私の命を狙うのだ？」

殺し屋 「それは……お前がマッドサイエンティストだからだ！」

暗転。



【未来サイド②】

明転。場所は双方の事務所。

上手側に弁護士・助手・ゲジラが、下手側にライ弁・未来B・サポがいる。

ライ弁「今回の裁判は証人尋問となります。現在私が提出している証人リストはこちらです」

助手「このリストの中から原告側が誰を証人として召喚するのか、予め予想しとかないとね」

弁護士「まあしかしこの中からであればおそらくは……」

サポ「私、でしょうか？」

助手「神山さんの名前がない以上、ゲジラさんのことをよく知りよく思わない人物となる

と、同じ反ゲジラ団体の彼女しかいないね」

ライ弁「と、國部弁護士達は考えるでしょうかね」

サポ「それでは私ではないと？ なんだか悪い匂いがしますね」

ライ弁「法は犯しませんのでご安心を」

弁護士「いや待ってください……！ 本当に彼女が証人なのでしょうか……！」

助手「え？」

未来B「お前のその策で、奴らに勝てるのか？」

ライ弁「勿論、と言いたいところですが、何かあと1つ決め手がほしいですねえ」

サポ「それでしたら私気になることを耳に挟みまして」

サポ、未来Bとライ弁のそばに寄り、話をする。

弁護士「こんな私なんか、私なんかが予想できる程度の策であの性悪弁護士が攻めてくる  
でしょうか……？」

助手「そんな心配しないでも、大丈夫じゃない？ 姉さん」

ゲジラ「そうですね。まさかそんな、まさか当日に私たちが全然予想しなかった人が証人で現れるなんてこと、ないですって」

弁護士「あんまりそういう感じで言わないでもらえませんか？」

ライ弁「……何ですって？ それは本当でしょうか？」

未来B「やはりゲジラは危険な存在だ……！」

サポ「ですので私は今からそれを確認できるよう心配しますので」

ライ弁「ではそちらはお願い致します。これがうまくいけば、我々の勝利は確実です」

未来B「今確実と言ったな荒原殿？ こちらもありとあらゆる手段で情報をかき集めているのだ……！ これで負けたら……お前の腕のなさが原因ということになるぞ！

絶対に勝てよ！」

ライ弁「……ええ、承知しております。では私は一度これで。(はけようとする) ああただ……神山さんもお気をつけください、スキヤンダル等には。法廷で不利になりますので。不倫は、程々に」

ライ弁、下手からはける。

未来B「不倫と言ったか今……」

サポ「(未来Bを見て)……ないわ」

未来B「私の台詞だ！」

ゲジラ「ああすみません！今の私の言い方なんか、フラグっぽかったですよね！」

助手「むしろよくフラグって言葉知ってますね。本当に色々こつちのこと詳しいですよね」  
ゲジラ「ああそれは、私が手助けした皆さんから色々教えてもらうからです。この前も、押すなよ！絶対押すなよ！と言って押す、という100年以上前から伝わる様

式美を教えてもらいました」

助手「様式美って教わったんですね」

未来B「しかしゲジラ……これでやっとその存在を追放できる……!!」

サポ「ええ、ゲジラは人類にとって滅ぶべき悪ですからね」

未来B「奴が存在するせいで娘は……! 娘の体は悪いままなのだ……!!」

サポ「その通りです、ゲジラが消えれば、娘様のお体もきつとよくなるでしょう」

未来B「ああ……! ゲジラ、最後まで徹底的にやってやる……!!」

サポ「あなたのその家族を守ろうとする強い意思で、必ず悪を滅ぼしましょう」

ゲジラ「でもどんな話でも知識でも、人間のことが知れたら嬉しんです、私」

助手「本当に僕たちと共に生きていって、思ってくれているんですね」

サポ「ゲジラと人類は決して相容れません」

弁護士「大丈夫です。必ずあなたを、害のない人間と認めてもらいます」

未来B「分かっている。必ずゲジラを、害の有る怪獣と認めさせてやる」

双方、そのまま法廷に移動する(原告側はライ弁と未来Bのみ、サポは一旦はける。  
舞台中央から裁判官が出てくる。

裁判官「これより第二回口頭弁論を始める。本日は証人尋問となる。それでは証人のゲジラ

氏、証言台へ」

弁護士・助手・ゲジラ「はあ!?!」

裁判官「はあ!?! なんかミスした!? ワタクシ」

助手「なんでキレてんだよ! のっけから感情豊かだな! じゃなくて、被告本人のゲジ

ラさんが証人って! リストにも名前はありませんよ!」

裁判官「いや、載っているぞ」

弁護士・助手「え？」

裁判官「さくじつ、証人リスト修正の申請を受けた。あなた達にも当然届いているはずですよ。助手「昨日って……！　くそ、そんなギリギリにリストを見直す訳ないだろ……！　やられた！」

ライ弁「まあ別に取り下げてもよろしいですよ。そんなに証言台でゲジラ氏にお話させるのを、恐れているのならね」

助手「こいつ……！　姉さんゲジラさん、大丈夫？」

ゲジラ「が、頑張って自分のことを話してきました……！　私は大丈夫です……！」

弁護士「私は無理です……！」

助手「姉さん？」

弁護士「こんな土壇場でリストのない証人が出現しその方に質問をするなんて高等技術、私なんかにはできるのか？　いやできない！」

助手「反語使って弱気なこと言わないで姉さん！」

裁判官「柔軟な対応ってね、難しいよね」

助手「何急に共感しにきてんだよ。裁判官がそれ言っちゃ駄目だろ。とにかく姉さん、落ち着いてよ」

弁護士「す、すみません……取り乱しました。もう大丈夫です」

裁判官「……それでは改めてゲジラ氏、証言台へ」

ゲジラ、証言台まで移動する。

裁判官「これより被告ゲジラ氏による証人尋問を始める。原告弁護士、前へ」

ライ弁、ゲジラの前まで移動する。

ライ弁「それではゲジラさんまず初めに……あなたは、怪獣ですか？」

ゲジラ「はい、怪獣です」

ライ弁「それでは本体、怪獣体での体長と重さを教えて頂けますか？」

弁護士「な、なんですかあれ……そんなにゲジラさんを怪獣と強調させたいのですか……！」

ゲジラ「体長は102メートル、重さは3万トンです」

弁護士「こうなったら……！」

助手「姉さん異議を申し立てようとしている？　やめた方が良くないんじゃない？　姉さんこっちで喋るのは緊張して苦手だよね？」

弁護士「……大丈夫です」

助手「姉さん……！」

ライ弁「ゲジラさん、怪獣体で吐く息は人間にとって有害ですか？」

弁護士「異議有り！」

助手「姉さん！」

弁護士「あ、あのですね……いい、今の質問はあんまり訴えと関係ないのではないかなんとか  
なんとか思ったり思わなかったり……ねえ？」

助手「姉さん！」

弁護士「つまりですね、私の言いたいことは………異議無し！」

助手「姉さん！ なぜいった！」

裁判官「また同じことをやったら法廷侮辱罪としますよ」

助手「これはホントその通りのやつだ………！ 姉さんはもう黙ってて」

弁護士「はい………」

ゲジラ「怪獣体で吐く息は……有害です」

ライ弁「そのような有害で巨大な体を維持するのに、普段は何を食されているのですか？」

ゲジラ「エネルギーを摂取できるなら何でも食べます」

ライ弁「何でもですか。それでは一番好きな食べ物は何？」

ゲジラ「機械類、ロボットです」

裁判官「ええ！？」

助手「めっちゃビビってるー！」

ゲジラ「私の体は活動に自然エネルギーが必要ですので、原子や電気、火力エネルギー等で  
動いているロボットは高エネルギー体で一番効率が良いので」

ライ弁「なるほどつまり我々人間とは一切異なる体内構造ということ。因みに何でも食せ  
ると仰いましたね、それではあなたは、人間を食べることも可能なのでしょうか？」

助手「異議有り！ その質問は明らかに誘導尋問だ！ 質問の取り下げを！」

裁判官「確かにそうですね。弁護人は質問の取り下げを、」

ライ弁「裁判長！ 我々の訴え、目的は人々の心の健康、平穏を守ること！ そのために私  
は心を鬼にして被告に確認しなければなりません………！ どうか、どうか  
お許しを………！」

裁判官「……ホロリ。質問を続けることを許可します」

助手「ホロリじゃねえよ！ 情に流されるな！ そういうの防ぐためのロボなんじゃな  
いの！？」

裁判官「それ以上は法廷侮辱罪としますよ」

助手「はい頂きましたー」

ライ弁「それでゲジラさん、人間を食べることは？」

ゲジラ「……はい、可能です」

ライ弁「それでは……まさか、まさかないとは思いますが、念のためお聞きしたいと思いま  
す。どうか気を悪くしないでください。なければ何も問題ありませんので。ゲジラ

さん、あなたは我々人間を、口にすることはありますか？」

助手「は？ あいつ何言って、」

ゲジラ「あります……」

助手「ゲジラさん……？」

ゲジラ「でもそれは！」

ライ弁「人数は！？ ではその人数を、教えてください！」

ゲジラ「……12人、です」

ライ弁「はあ……！ そうですか、分かりました。ではこれで私からの質問は、以上です」

弁護士「異議有り！」

ライ弁「……はあ？」

弁護士「異議有り異議有り異議有り異議有り！」

助手「姉さん、法廷侮辱罪に、」

裁判官「國部弁護士……セーフ」

助手「なんでだよ。さじ加減が分からん。いやよかったけど」

弁護士「失礼しました。しかしこれでもまだすつきりしません。ですので残りは、証言台の前で」

裁判官「それでは被告弁護人、前へ」

弁護士、証言台の前へ移動する。

弁護士「ゲジラさん、私もまずはあなたの体のことをお聞かせください。と言っても、今のお体の方ですが。身長と……女性にお聞きするのは忍びないのですが、体重は？」

ゲジラ「160センチ、50キロです」

弁護士「それではゲジラさん、最近は何体と今いるお体、どちらでの活動時間が長いですか？ 睡眠時間は入れなくてけっこうです」

弁護士「それは、本体はこちらの体と言っても差し支えないでしょうね。因みに普段はそれのお体で何を？」

ゲジラ「主に人間の皆さんと……ボランティア活動をしています」

弁護士「ご立派です。そんな奉仕活動をするゲジラさん、先ほど人を食べることは可能と仰っておりますが……それでは人間を、食べたいと思えますか？ はつきりとお答え願います」

ゲジラ「いいえ！」

弁護士「ですよ？ マズそうですもんねえ。ちなみに私も彼（助手）も人間を食べることは、可能です。我々は雑食なので。ゲジラさんと、同じです。それではなぜゲジラ

さんはそんな食べたくもない人間を口にしたのでしょうか？12人も  
助手「き、聞いて大丈夫なの？ 姉さん」

弁護士、助手に手をかざす。

ゲジラ「それは、私の体を調査したいと依頼を受けたからです。そして12人の調査員の  
方々を、口の中へ」

弁護士「なるほど……調査でしたか。優しいですねゲジラさんは。普通嫌ですよ！ 口の中  
を誰かに弄り回されるなんて！ 勿論その調査員の方々は？」

ゲジラ「はい、皆さん無事です」

弁護士「それでは最後に、なぜそのような調査を引き受けようと思ったのでしょうか？  
ゲジラ「これで少しでも私のことを人間に知ってもらえたらいいなと、思ったからです」

弁護士「質問は、以上です！」  
裁判官「さて……双方の質問により、被告ゲジラ氏からとれた証言はどれも有力なものでし  
た。それらを充分に考慮し、今回の裁判の判決を下します」

未来B「荒原殿」

ライ弁「……分かっております」

裁判官「原告側は今すぐ訴えの棄却を……」

サポ「ちよつと待ってくださいませ〜」

下手側からサポが入ってくる。そしてライ弁に資料を手渡す。ライ弁、それを見る  
ことなく話し始める。

ライ弁「裁判長、何やら興味深い資料が届きました。この資料は先ほど被告側の話にも出た  
12人の調査員に調査してもらった結果です」

助手「なんだって……」

ライ弁「このゲジラさん、どうやら地球育ちではありませんが、地球生まれではないようです  
ね。つまり……彼は地球外生命体なのです！ 少なくとも、人間ではありません！  
これ（資料）を証拠資料として、提出します」

資料を受け取る裁判官。

ライ弁「散々自分は人間と同じ存在だと語っていた者がまさかこのような重大なことを隠  
していたとは……こんな者を我々は信じて良いのでしょうか！？」

裁判官「ふむ……（資料を読みながら）この資料の表紙、できる男はおならがクサイ、と書  
いてあるが」

サポ「……こっちの資料でした」

サポ、裁判官に資料を渡す。

助手「今の何の資料？」

ライ弁「失礼しました。改めまして、我々はこの資料を元に上訴致します！ 内容はそのままですが、今度はゲジラ氏を宇宙人として、訴えなおします！」

弁護士「ななななんですって……！！ そ、それでは……！！」

ライ弁「そうです。最高裁にて、世界初の宇宙法適用裁判で戦いましょう、國部弁護士」

暗転。

【宇宙人サイド②】

明転。

場所は宇宙船。舞台にはモニターを見ている、リーダー、宇宙2、宇宙3の3人。

リーダー・宇宙2 「ふい〜！」

宇宙2 「地球人の皆さん、隕石を破壊できるミサイルは用意できたみたいですね〜」

リーダー 「ああ。完全破壊とまではいかないようだが、それが逆に地球人へ適度な被害を与えられることになりそうだ。結果としてはよかったよ」

宇宙3 「……俺の、おかげですかね!？」

リーダー 「うるさいわ! たまたまそうなったただけだろ! それに環境だって少しは破壊されるんだからな」

宇宙2 「まあまあくですので今度こそ完璧に地球を侵略する方法を考えましょう〜」

リーダー 「……そうだな。この前出た、環境を守りつつ地球人だけ滅ぼす方向で作戦を考える。

何か具体案がある者はいるか?」

宇宙3 「はい!〜!」

リーダー 「聞き方を間違えた。トモ子君、何か案はないか?」

宇宙3 「酷い!〜!」

宇宙2 「とりあえずラエル君の案を聞いてみましょうよ〜」

リーダー 「……大丈夫か? 環境を守りつつ地球人だけ排除する、だぞ?」

宇宙3 「……もう一度考えます!」

リーダー 「おーう、まあまあまあ……良い心がけだ。それでは他に何か案がある者は、」

宇宙3 「はい!〜!」

リーダー 「早くない? ホントに大丈夫か? 環境を守りつつ地球人だけ排除する、だぞ?」

宇宙3 「……もう一度考えます!」

リーダー 「なんでだよ! 1回目はまだしも2回目はなんでだよ!」

宇宙3 「慎重になってしまつて〜! もう怒られたらなくなつて〜!」

リーダー 「心からの声だな……まあ分かるよ? いい年して怒られたくない気持ちは」

宇宙3 「うお〜! (考え込む)」

宇宙2 「ラエル君ラエル君〜」

宇宙2、ごによごによと宇宙3に耳打ちしている。

リーダー 「いやそんなわざわざトモ子君から案を与えなくても良いんだぞ? 直接キミが言

えば良いだろうが」

宇宙3 「リーダー! 2人で、有給とっても良いですか?」



リーダー「何の話してたの？ 駄目だよ。なんでタイミングなんだよ。トモ子君も、もっと真面目に何か案はないのか？」

宇宙2「それではく母星の最新兵器を投入してみるのはどうでしょう？」

リーダー「何？ 最新兵器というたまさか、あれか？」

宇宙2「そう、あれ、です」

宇宙3、知ってるっぽさを出す。

リーダー「(宇宙3を見て)……無理しなくて良い」

宇宙3「はいー！」

リーダー「つまり、使用試験も兼ねてということか。悪くない」

宇宙2「はい。この兵器なら投入した環境にもよりますが、地球人を敵とみなし地球人だけに害を為すような攻撃をしてくれるでしょう」

リーダー「我々はそれを高みの見物、という訳か。しかしこの兵器、投入した土地に充分に環境適用させる必要がある訳だが、起動するまでどれくらいの時間が必要か分かるか？」

宇宙2「はい。まあそんなにはかからないですね。投入から起動するまで大体100年くらいですかね」

間

リーダー「すぐだな」

宇宙2「すぐですね。まあ100年なんて私たちの寿命からすれば屁みたいなもんですからね」

宇宙3「それでは兵器が起動するまでの100年間は……この辺の星を回って遊んだりするんですか!？」

リーダー「……そうする？」

宇宙3「そうしましょう！」

リーダーと宇宙3、めっちゃはしゃいでいる。

宇宙2「それではく兵器の種を地球に投入しますね」

リーダー・宇宙3「(はしゃぎながら)うえーい！」

宇宙2「スイッチオン。………はい、無事に地球に種が埋め込まれました」

リーダー・宇宙3「(はしゃぎながら)うえーい！」

宇宙2「それでは念のため兵器の成長シミュレートを」

リーダー・宇宙3 「はしやぎながら」 うえーい!!」  
宇宙2 「おや? このままだと地球人が放つミサイルで粉々になる隕石の破片群が」  
リーダー・宇宙3 「はしやぎながら」 うえーい!!」  
宇宙2 「まずいことに今埋め込んだ兵器の種を破壊してしまいますね」  
リーダー 「はしやぎながら」 うえーい!!」

間

宇宙3 「うえーいじゃないでしょ!」  
宇宙2 「話聞いてました?」  
宇宙3 「……僕は聞いてなかったです」  
リーダー 「なんだお前」  
宇宙2 「とにかくこのままだと最新兵器がばあになっちゃいますね。あの隕石を完全に破壊しないと」  
リーダー 「とはいえこちらから破壊してしまったら地球側から不信に思われないか?」  
宇宙2 「それでしたら地球の宇宙ステーションで我々の科学力をちよちよいと投入しちゃいましょう。今から隕石完全破壊のプログラムを組みます」  
リーダー 「うむ。ではトモ子君、そのプログラムが組め次第そのまま地球人のところへ、」  
宇宙3 「ちよつと待ってください!!」  
リーダー 「いや待たない」  
宇宙3 「えー!? ちよつと待ってくださいよ!!」  
リーダー 「何? どうせ碌なことではないのだろう?」  
宇宙3 「いえ! そもそもこうなったのは俺の責任……! ですので! 俺が地球人のところへ行って隕石を完全に破壊してきます!」  
宇宙2 「ラエル君、私の代わりにさかっこいい」  
リーダー 「いやいやいや、お前が1人で? 超心配なんだけど?」  
宇宙2 「大丈夫ですよ。ただこのプログラムの入ったデータを地球人に渡してくるだけですから」

宇宙2、宇宙3にプログラムの入ったデータを渡す。

リーダー 「まあそれくらいなら大丈夫か……? 分かってるとは思うが、俺たち男は触覚があるんだから宇宙人とバレないようにちゃんと地球人に化けていくんだぞ?」  
宇宙3 「……ああ! (気づき)」  
リーダー 「ほら、これだもの。こんなことにも気が回っていないよ? 分かってる? なんかテキトーに未来の地球から隕石を止めるためにやって来たとかって言うんだ

「超巨大環境怪獣ゲジラ」

ぞ？」

宇宙2 「もう大丈夫ですって〜」

宇宙3 「それでは！ 最新兵器ゲジラを守るため！ 行ってきますー！！」

宇宙3、はける。徐々に暗転していく。

宇宙2 「頑張ってね〜」

リーダー 「隕石の被害とかもちよつと大げさな感じで言うんだぞー！！」

完全暗転。

【現代サイド③】

明転。場所は宇宙ステーション。現代サイド②の続き。

研究員「なぜ、私の命を狙うのだ？」

殺し屋「それは……お前がマッドサイエンティストだからだ！」

未来A・未来B「え？ そうなの？」

研究員「いやいやいやまさか！ 私はそんな狂った研究者ではない！」

殺し屋「しかしお前の研究によって、未来の地球は甚大な被害を受けてしまうのだ！ それ

はもう！ 甚大な！ とても甚大な被害だ！」

研究員「あれ？ このパターンさっきも見たけど……あの、それは本当に甚大な被害なのか？」

殺し屋「それはもう甚大だ。人間の8割は消え、地球はそのまま滅びる」

研究員「今度は本当にヤバイやつじゃねえか！」

殺し屋「だからそう言っているだろう。そしてそれを引き起こす原因が、お前なのだ」

未来B「一体……なぜそのようなことに？」

殺し屋「少々長くはなるが……話そうか。この男、研究員古澤は若くして様々な科学分野での研究で成果を残す、所謂天才だった」

未来A・未来B「え？ そうなの？」

研究員「これはまあ……そうなのかなあ？ うふふ」

オペ子「主任は時々今みたいにキモくなりますが、天才ですよ」

研究員「横田君……！ 今天才って……！」

未来B「キモいって言われたことは気にしないのか……」

殺し屋「そんな天才研究者も、1人の人間。そう……彼にはまだ駆け出しの研究員だった頃からたった1人、密かに愛する者がいたのだ」

研究員「え？」

殺し屋「その愛する者とは、」

研究員「ちよちよちよちよ（殺し屋を止める）」

殺し屋「……その愛する者とは、」

研究員「ちよちよいちよーい、ちよっと待って」

殺し屋「どうした？」

未来A「なんだよー！ 今良いところだろうが！」

研究員「え？ それ……今言う必要があるう？」

殺し屋「未来を語る上で重要な事柄だ。知りたいのだろうか？ なぜ地球が滅びるか」

研究員「いやまあそうなんだけど……」

オペ子「主任、好きな方がいたんですね」

研究員「……いるよおー？ そりゃあ？ 人間だものー。逆に聞くけどお……横田君には今、  
そういう好きな人みたいなのは……いるのかい？」

オペ子「私は、」

研究員「やっぱりやめてー！ 恐いー！ ちよちよ、とりあえずさ！ 誰が好きかとい  
うのは一旦、オフレコで話を進めてくれないかな？」

殺し屋「そこにいる横田さんだ」

研究員「おああああ！！！」

未来A「そうだったのか！ へいへーい！（茶化す）」

オペ子「主任、私のこと好きだったんですね（ローテンションで）」

未来A「こっちは反応が薄いぜー！」

研究員「横田君……！ あの、私は、キミのこと、なんて別に全然好きじゃねーし！」

未来A「ごまかし方が小学生だぜー！」

未来B「ホントに天才なのこの人？」

研究員「マジ勘違いすんなし！」

殺し屋「彼の横田を想う愛する気持ちはとても、深かった」

研究員「おああああ！！！」

未来B「こっちはこっちで容赦ないな」

オペ子「そんなに深いんですか？」

研究員「いやホント違うし。例え好きだとしても、ベクトルが違うやつだから。あの、あれ

よ、エロい感じで見てただけだから、うん、これは違うわ、無し。いやでも別にエ

ロさを感じないって訳じゃないから！ むしろそのスタイルやよし！ うん……

どうすれば良い？ 私は」

→台詞中、研究員をじっと見つめているオペ子。

未来A「もう彼を見ないであげてくれ！（オペ子の顔を反対に向ける）」

研究員「そうだ……寝よう。終わったら起こして（丸まる）」

未来B「現実逃避してしまった……」

殺し屋「しかしそんな愛する横田研究員に悲劇が訪れる。今から3年後、若くして彼女は不

治の病を患ってしまうのだ」

4人「え？」

オペ子「不治の……病？」

殺し屋「それは当時の医学では治療が確立していない病だった。そして彼女はその後

……その命を落としてしまうのだ」

オペ子「そんな……」

殺し屋「動揺するのも無理はない」

オペ子「それでは……私はあと3年とちよつとで、」

研究員「死ぬんですかああ！？ あと3年で横田君死んでしまうん！？（めっちゃ動揺する）」

未来A「この人本人より動揺してる！」

オペ子「主任、落ち着いてください」

未来A「本人に宥められてるし！」

殺し屋「彼女の死を、古澤は受け入れることはできなかった」

古澤、激しく動揺している。

未来B「まあ……見る限り、そうだろうね」

殺し屋「そして彼は犯してしまったのだ。科学倫理、生命倫理を」

未来B「まさか……!!」

殺し屋「そう、彼は彼女を生き返らせる研究に没頭した。その頃築いていた地位を利用し、ありとあらゆる研究を行った。それは勿論非道と呼ばれる研究も多分に含まれていた。その研究資料の一部が内ポケットに入っているのだが、見てみてくれ」

オペ子、殺し屋の内ポケットから資料を取り出し未来Aに見せようとする。

未来A「いや無理無理無理！ そういうグロイ暴力系のやつ！……できる男はおならがク

サイ……?」

殺し屋「それじゃないな。こっちの資料だ（別の資料を示す）」

オペ子、殺し屋から別の資料を取り出し、未来Aに見せる。資料を読んだ未来A、そのままスーツと倒れる。↓少ししたら起き上がる。

未来B「そんなに！？（資料を読む）うわうわうわ！ 確かにこれは想像以上にヤバい研究

内容だ……」

研究員「これはヒクわー」

未来B「いや未来であなたがやることだけだな」

研究員「ふふ……そうだな……その通りだよ」

未来A・未来B「え？」

研究員「確かに研究内容は酷いものだったが……そうまでしても彼女を生き返らせようとする気持ちは、よく分かるよ」

未来A「この人……!!」

未来B「ああ……やはりマッドサイエンティストだったか」

研究員「マッドサイエンティストか……本当に、そう言えるのか？」

未来B「何？」

研究員「愛する人にもう一度会いたいと願うことはおかしいことなのか？それができる頭脳と手段を持っていたら、それに手を伸ばしてしまうことは人間ならば普通ではないのか！？ そんな私をマッドサイエンティスト、狂っているとと言えるのか！？」

未来A・未来B「それは……………」

殺し屋「更に彼は、生き返らせる過程で彼女の肉体を改造し、様々な装置を取り入れた」

未来A・未来B「え？」

殺し屋「口から入れた水を一瞬でお湯にする給湯機能、拾った声を大きくする拡声機能、そして肩にはミサイル発射機能、目と口からはレーザー、果ては体を超巨大化できる機能まで108つの機能を彼女の体に取り入れた」

研究員「愛する人にミサイルやレーザーをつけようと思うのはおかしいことなのか！？ そんな私を、マッドサイエンティストと言えるのか！？」

未来A「それは言えるよ！ めっちゃ狂ってるよ！」

未来B「やっぱりマッドサイエンティストだ…………絶対拡声機能とかいらなだろう…………」

研究員「いや必要だ！ どんな小さな横田君の声も拾って聞き逃さないために！」

未来A「ただの変態だ！」

オペ子「主任…………私の体にそんなことをする気なのですか…………？」

研究員「あ、いや横田君…………！ 今のはその…………あの…………何というかその…………！」

殺し屋「くつくつく…………！」

未来B「はっ！ まさかあの男…………こうなることを予想して…………！」

殺し屋『（計画通りだ…………古澤研究員の危険な研究はそもそも横田研究員と結ばれていることが前提…………！ 彼を消すのが無理なら、初めから彼女にこっぴどくフラれさせ、彼女への未練を完全排除すれば良いのだ…………！ くつくつく…………！）』

オペ子「古澤主任…………惚れました」

#### 間

4人「ええ！？（オペ子の方をバツと見る）」

殺し屋「いやなんで！？」

オペ子「私の体をそんなマッドな兵器にしようと考えてくれてるなんて…………めっちゃ素敵です。愛が伝わってきました」

未来A「この人もかなり狂ってる！」

未来B「ある意味お似合いだよこの2人」

研究員「お似合いって…………やめろよお（2人で照れる）」

殺し屋「くそ…………！ 最悪の展開だ…………！」

研究員「しかしこれで我々も恋人同士か。未永く仲良く暮らしていこう、横田君」

オペ子「いや私あと3年で死んでしまいますが」

研究員「そうだったあああ！！ 私は！ 未来の私は！ その研究を成功させたのか！？」

殺し屋「……長い研究の成果により40年後、お前は横田を生き返らせることには成功する」

研究員「おお！ よくやった未来の私！」

殺し屋「しかし、彼女の体を維持するために、当時の技術力ではどうしてもクリアできない

問題が出てきてしまう」

研究員「何？」

殺し屋「そしてお前はその問題を解決する技術力が未来に生まれていることに賭け、2人で

コールドスリープすることに決めたのだ」

研究員「コールドスリープ……40年後には確立されているのか」

未来B「確かにその時代にはその技術はあったが、まだ完璧ではなかったはずだ」

殺し屋「そう、まだ完璧ではない技術力、そして古澤がすでに老体であったことも影響し、

古澤は設定した未来でコールドスリープから目覚めることに失敗、そのまま帰ら

ぬ人になってしまうのだ」

研究員「そ、そんな……」

殺し屋「結果的に横田のみが設定した未来で目覚めることになってしまう。しかし彼女の改

造された体はまだまだ不安定、彼女を制御できる古澤もいない。彼女は次第に自分

をコントロールできなくなり、強大な力を持ったまま巨大化し、暴走してしまうの

だ……！！」

研究員「なんてことだ……それでは地球を滅ぼしたのは……！！」

オペ子「暴走した……私？」

暗転。



【未来サイド③】

場所は裁判所。舞台には弁護士、ゲジラ、ライ弁、未来B、裁判官。明転。

裁判官「これより最高裁での最終弁論を始める」

ライ弁「最高裁なのに同じロボット判事ですか？ 上の裁判官では？」

裁判官「冒頭から冗談とは余裕がありますね荒原弁護士。私はデルタ型ヤマダ3号、シングルナンバーだ。32号とは全く違うでしょう？」

ライ弁「……はい、全く、違いました」

裁判官「それでは、原告の主張から。弁護士、前へ」

ライ弁「はい」

照明変化。場所は裁判所の外。舞台前方にライ弁、未来B、サポ。そこに弁護士が詰め寄る。

弁護士「荒原弁護士……！」

ライ弁「如何なさいましたか？ そんな恐いお顔をして」

弁護士「あなた初めから分かっておりましたね？ ゲジラさんが地球外生命体であることを……！」

ライ弁「國部弁護士……あなたの腕を信頼してよかった。あなたは私がゲジラにした尋問を余すことなく全て跳ね返してくれました。そのおかげでゲジラは人間だという印象を強く刷り込ませることができましたよ」

未来B「しかしゲジラを信じたその直後、実は人間とは全く異なる存在、宇宙人だったと覆せばその印象は途端に悪くなる、という訳だ」

弁護士「くっ……！」

ライ弁「そして難なく宇宙法の適用をこぎつけられました。こうなればもう我々の勝利は確実です。今までゲジラは怪獣と言えど、地球上のただの大きな生物として法律が適用されておりましたが」

サポ「宇宙人、宇宙法となると途端にその捉え方は変わります」

照明変化。場所は裁判所。

ライ弁「裁判長、中身は同じでも宇宙人の時点でその扱われ方は全く異なります。そう！ゲジラ氏は宇宙法により大量の罪を犯した犯罪者となるのです！ 宇宙法第18条、宇宙人は不用意に地球人の領土を侵してはならない。ゲジラ氏はその巨体で日本

の土地、領土に居続けております！ 宇宙法第22条、宇宙人は自らの都合で地球人の健康を害してはならない。ゲジラ氏はその息で大量の人間を害しました！  
そして宇宙法第7条、ゲジラ氏は……」

照明変化。場所は裁判所の外。

サポ「今彼がこの場で出ただけでも、宇宙法ではゲジラ氏はこれ程の罪を犯していることになります」

ライ弁「残り3日でこれら全てを覆すものをあなた方がどう準備してくるのか、楽しみにしております。まあこちらの準備は、先の裁判で使用した証拠資料を再びコピーして持ってくれば良いだけですがね」

弁護士「荒原弁護士……和解を、提案したいのですが」

ライ弁「まあ、賢明な判断でしょうね。しかし」

未来B「待て！ 和解などする気はない」

サポ「その通りです」

弁護士「神山さん。ゲジラさんは、例え宇宙人だとしても……我々と同じ心を持つ同志、いや、我々以上に優しい心を持つ、同志でございます……！」

未来B「違う！ やつはただ我々人類に害を与えるだけの存在だ！ 今は大人しくともいずれ必ずその本性を表す！ ゲジラは世界を脅かす！ そうなった時、お前が責任を取れるとでも言うのか！？」

弁護士「それは……無理です」

未来B「ほらみる！」

弁護士「絶対に起こらないことの責任を、どうとれば良いのか分かりませんので」

未来B「……良いだろう……！ ではこの3日間で証明してみれば良い！ ゲジラがこの地球で必要たる存在であることを！」

弁護士「証明……？」

ライ弁「無理を言いますねえ。まあそれができたとしても、今私が挙げた大量の罪が消える訳でもないですが」

弁護士「消える……？」

ライ弁「さあもう良いでしょう。そろそろ、」

弁護士「……そ、そうです！」

ライ弁「はい？」

弁護士「そうですそうですそうです！ なるほど今回は宇宙法ですもんね！」

未来B「な、なんだ？」

ライ弁「……良い病院を紹介しましょうか？」

弁護士「ありがとうございます！ 二人とも！ それでは3日後、最終弁論でお会いしまし

よう！

サポ「……おやおやくこれは」

照明変化。場所は裁判所。

裁判官「原告弁護士、主張は以上で？」

ライ弁「ええ」

裁判官「それでは被告側の最終弁論を始める。弁護士、前へ」

弁護士、前へ出る。

弁護士「最近是一部で地球外の交流も行われ始めました。そのおかげで様々な科学的恩恵等を得ることができましたが、その反面で我々地球人はそこから降りかかる不利益も予期しなければなりません。そのために制定されたのが、宇宙人を対象とした宇宙法です」

ライ弁「異議有り」

裁判官「そうですね。歴史の授業はロースクールの教室で行ってください」

弁護士「失礼しました。しかしいざ宇宙法を適用しようとしても、我々とは育った環境も文化も異なる宇宙人を裁くというのは、我々地球人を裁くことよりも遥かに難しい問題です。より一層慎重に考慮し、ことを進めなければなりません。時には一度提示された罪や証拠にメスを入れ、柔軟に対応することも求められます。そのために制定された法律は、ご存知でございませぬかね？」

ライ弁「まさか……」

裁判官「勿論把握している。宇宙法第12条、宇宙人を訴えるのに提示された証拠に不備の可能性がみられる場合、救済措置としてその宇宙人の利益を示す証拠を同量もしくはそれ以上の量を示すことができた場合、罪を酌量した判決を下さなければならぬ」

ライ弁「異議有り！ 我々の示した証拠に不備などありません！ それは前回の裁判で提出した証拠と全く同じものです！」

弁護士「よかった……それが聞きたかったのですよ」

ライ弁「何ですって……？」

弁護士「前回原告側が提出した資料はゲジラさんを地球の生物として調査した資料です！ しかし今回ゲジラさんは宇宙人として招集を受けております！ それならば証拠資料はゲジラさんを宇宙人として再度調査し直した資料を用意しなければなりません！」

ライ弁「異議有り！ ここは小学校ですか！？ そんな意見はただの屁理屈だ！ 宇宙人

として招集されていようがゲジラ氏の中身は前回と全く同じです！」

裁判官「確かに荒原弁護士の言う通りですね。しかし荒原弁護士、先ほどの主張であなたは、中身は同じでも宇宙人の時点で扱われ方は全く異なると発言したばかりですよ？」

ライ弁「それは……！」

裁判官「発言の取り消しは認められません。よって異議も認めません。原告側が用意した証拠は不備があるものとします」

ライ弁「良いでしょう……！　しかしこの短期間でゲジラに利益のある行動をとらせることは不可能です！」

弁護士「ええ、それは勿論。ですから、」

ライ弁「異議有り！　これからその利益の証拠を集めますでは話になりません！」

弁護士「ええ、ですから……！」

大量の書類を持った助手が現れ、全ての書類を裁判官に提出する。

弁護士「これで、問題ありませんよね？」

裁判官「この書類は？」

弁護士「ゲジラさんの利益を示す証拠、これまでゲジラさんに助けられた、救われたという方々の署名です。その内容も詳しく記されております」

助手「勿論全てゲジラさんが宇宙人と伝えた上で記してもらった署名ですよ」

ライ弁「馬鹿な……今までこんなにもゲジラは人々を助けていたというのですか……？　いやそれだけではない、たった3日でどうやってこんな量の署名を集めたというのですか……？」

弁護士「ふふふ……説明しておやりなさい！　憲さん！」

助手「それはこの最新科学兵器、感情転送装置を使ったのさ！（コンパクトな機械を取り出す）通常の転送装置はエネルギーを多量に消費するため連続で使用することはできないけど、これは感情に反応してその感情をエネルギーに変換させ物体を送ることができる装置！　通常の転送装置同様、面識のある人のみに届くけど感情反応をプラスに設定すれば、ゲジラさんに好意を抱く人限定で情報が伝わるという寸法さ！　後は転送伝達範囲をゲジラさんの活動範囲に合わせて送信、署名とその詳細を頂き再転送してもらったという訳だよ！」

弁護士「（→途中で理解するのを諦めゲジラと談笑する）……という、ことです！」

助手「姉さん途中で諦めたよね？」

ライ弁「くっ！　なるほど……！　転送装置が……あの、感情反応で、応用した、ということですかあ……！」

助手「うんこっちも分かってなさそうだな」

弁護士「ゲジラさんは、別に人間じゃなくてもよかったです。怪獣だろうが宇宙人だろう

が我々と仲良くなれる、助けてくれる存在なら、それで。この量の人助けは数日やそこらでできることではありません。常日頃から人を愛し、人の役に立ちたいと願うゲジラさんだからこそ、この量の署名になったのです」

弁護士と助手、席に戻る。

裁判官「それでは判決を下す。宇宙法による罪は酌量の余地有りとし今回は無効とする。原告側には訴えの取り下げを命じ、ゲジラ氏には人間体での生活を認めましょう。ただし今後怪獣体、勿論人間体でも周りに害を与える行為、暴行等は決して行わないように。分かりましたね？」

ゲジラ「はい、勿論です」

裁判官「ではこれにて閉廷」

未来B「おい……もう一度上訴しろ……!!」

ライ弁「……もう、無理です」

未来B「ふざけるな！」

サポ「あくららく負けちゃいましたか」

未来B「お前も！ なぜこんな時までのん気な声を出せる!?!」

サポ「まあまあ神山さんくとりあえずお二方く私についてきてください」

ライ弁と未来B、サポの後ろについていきはける。

ゲジラ「本当に、ありがとうございました……!!」

弁護士「(めっちゃ震えながら) いえいえいえ！ 感謝ならどうか、ご自分に！ 勝てたの

はゲジラさんが日頃から善意ある行動をしていたからで、」

ゲジラ「いえ。あなたのおかげです。あなたを頼って、本当によかった」

弁護士「ゲジラさん……」

弁護士、握手の手を出す。ゲジラ、弁護士の手にゴミを乗せる。

弁護士「いや違う違う！ なんで!?!」

ゲジラ「ああすみません！ 以前荒原弁護士がやっていたので人間達の流行りの挨拶かと！」

弁護士「そんな訳ないでしょう！」

助手「これからもっとこつちのこと、慣れていってくださいね」

弱明。反対側からライ弁、未来B、サポが出てくる。

明転。

未来B 「こんなところに呼び出してどういうつもりだ？」

サポ 「じゃくん。あれを見てください」

サポが裏を指差す。

ライ弁 「あれはまさか……！ タイムマシンですか……！？」

サポ 「正解です。10ポイント差し上げます。それではこれを使って今から私がやるうとしていることは分かりますか？」

ライ弁 「まさか……！！」

未来B 「過去の改ざん……歴史改編、か？」

サポ 「びんぼうくん。今度は神山さんに10ポイントです。過去に飛んでこの裁判を最初からやり直しちゃいましょう」

ライ弁 「馬鹿な！ 歴史改編は時空法でも違法中の違法ですよ！？」

サポ 「大丈夫ですよ。慎重にやれば絶対にバレませんって。そもそもあなたが負けたのがいけないですよ。でも過去に戻ればあら不思議。世間が注目するこの裁判、今度はあなたが勝利しちゃいます。あなたも嫌でしょう？ 負けたままでいるのは？」

ライ弁 「……ふふ、確かに私は敗北者という存在が嫌いです」

サポ 「はい」

ライ弁 「ですので今の自分のことは大嫌いです。しかし私がこの世で最も嫌いな者は、法を犯す者だ。私はこれ以上自分のことを嫌いになりたくありません。ナルシストなので」

サポ 「あらそうですか」

ライ弁 「ええ。今すぐこのことを警察に報告致します。お許しを」

サポ 「それでは過去には神山さんと私の2人で行ってきます。あなたを黙らせてから、ね」

サポ、銃を取り出しライ弁に向ける。

ライ弁 「何！？」

サポ 「この銃は超圧縮粒子型電撃銃です」

ライ弁 「な、なんだって？」

サポ 「これを受けた相手は、少しの間動けなくなりますよ」

ライ弁 「くっ……！！」

サポ 「さあ神山さん、今のうちにタイムマシンに乗って裁判の最初の日に設定を〜」  
未来B 「違〜う……」

サポ 「え〜？」

未来B 「もはや裁判など生ぬるい……！ 私は……ゲジラの存在自体を消しにい〜く……！」

サポ 「え〜と〜？」

未来B 「分からないかキミ？ それではポイントはあげられないな。キミは以前100年前の隕石完全破壊がゲジラ誕生の原因と言っていたな？ だったら私は……その隕石破壊を止めに100年前へ時空移動する！」

サポ 「ちょ、ちよと〜。神山さん、それはいけません〜いけませんよ〜」

サポ、未来Bに銃を向ける。

サポ 「私の言う通りにしないと撃ちますよ〜。撃つぞ〜？ ええ〜？ 撃つてしま〜うぞ〜？ 私は〜撃つぞ〜？」

ライ弁 「全然撃たないですなあなた！」

全然撃つてこないサポに近づき銃を奪う未来B。そしてタイムマシンに近づく。

ライ弁 「神山さん！ 考え直すのです！ 歴史改編は、」

未来B、ライ弁を電撃銃で撃つ。

ライ弁 「ぐわああああ！！！（そのまま倒れる）」

サポ 「ホントに撃ちおつた〜なんて野蛮なんだ〜地球人は〜」

未来B 「私が……！ 家族を守るんだ……！」

未来B、タイムマシンのある方へはける。

サポ 「とりあえず〜リーダーに報告せねば〜」

サポ、反対方向へはける。

ライ弁 「くっ……！ 急いで……彼女達に伝えなければ……！」

ライ弁、一旦はける。その後弁護士、ゲジラが出てくる。再びライ弁が軽快に出てくる。

弁護士「あ、荒原弁護士？ どうしました？ そんな軽快なステップで」

ライ弁「いえなぜか肩こりが完全にとれたので体が軽く……いえそんな話ではなく！ 申し訳ございません、あなた方に急ぎお伝えしないといけないことが……！」

弁護士「どうしましたか？」

ライ弁「神山さんがタイムマシンで100年前に飛び、ゲジラさんの存在を完全に消し去ろうとしているのです！」

弁護士「なんですと……！！ 過去の改編なんて不毛なだけですのに……！！」

助手「姉さん！ 大変！ 大変だよ！」

助手が慌てて出てくる。

弁護士「歴史改編のお話でしょうか？ それなら私も今、」

助手「歴史改編？ 違うよ！ とにかく今が大変なことになってるんだよ！ 超巨大

ロボ……？ いや、超巨大改造人間が暴れまわっているんだ！」

間

弁護士・ゲジラ・ライ弁「はあ！？」

暗転。



【宇宙人サイド③】

場所は宇宙船。明転。

舞台上に宇宙2と宇宙3が出てくる。

宇宙3 「いや〜星間旅行めっちゃ楽しかったですねぇ〜！」

宇宙2 「100年なんてあつという間でしたねぇいえいえい〜」

リーダー 「お前達、今日から地球侵略作戦の再開だぞ」

リーダー、出てくるがめっちゃ羽目を外した格好。

リーダー 「そろそろ気を引き締めろ」

宇宙3 「いやリーダーまだバカンス気分!!」

リーダー 「はっ！ すまんすまん。(服を脱ぐ) さて、それでは早速100年前地球に投入したゲジラの様子を見ようか。トモ子君」

宇宙2 「はい〜」

宇宙2、モニターを操作する。3人、モニターを見る。

3人 「おお〜!!」

リーダー 「見事に超巨大怪獣に育っているな！」

宇宙3 「めっちゃ大きいですね!!」

リーダー 「これも100年前キミが隕石の完全破壊を成功させたおかげだな！」

宇宙3 「俺だってやればできるのですよ!!」

宇宙2 「あれ〜？ でもちよっと様子がおかしいですね〜？」

リーダー 「なぬ？ また何か問題が？」

宇宙2 「はい〜ゲジラが少々穏やかに育ち過ぎていますねぇ。地球人への憎しみが非常に弱いのです〜」

リーダー 「あの最新兵器は育つ環境によって形成される性格は大きく変わるからな。地球は宇宙的に見ればまだまだ優れた自然環境。そのせいで優しい性格になってしまったという訳か……」

宇宙2 「これでは地球人を滅ぼすことはおろか、害を与えさせるのも難しそうですね〜」

宇宙3 「え？ それじゃあゲジラ、地球人に悪いことしないんですか？」

リーダー 「そうだな……」

宇宙3 「えー！ じゃあゲジラが地球人にしゃかしゃか振った後のコーラを渡したりしないんですか!？」

リーダー「何その可愛いいたずら。そもそもそんなことさせないわ。されたらちよつと嫌だけども」

宇宙2「それだ〜」

リーダー・宇宙3「え？」

リーダー「しゃかしゃかコーラか？」

宇宙2「はい〜しかしいたずらするのは逆、地球人の方です〜」

リーダー「どういことだ？」

宇宙2「地球人にゲジラへとびっきりの嫌がらせをさせるんですよ〜つまりこちらが手を回し、ゲジラに地球人へ憎しみを抱かせるのです〜」

リーダー「いやしかしゲジラは今優しい性格なのだろう？ そんな簡単にいくのか？」

宇宙2「ノンノン〜優しい性格程闇堕ちもしやすいんですよ。まあ見ててくださいい〜。私がちよちよいとゲジラに泥沼のような憎しみを与えてきますよ〜（変なジェスチャー）」

リーダー「何をやっているんだ？」

宇宙2「鼻にゲソをつめています〜」

リーダー「なんだそれ」

宇宙2「それでは〜早速地球へ行ってきます〜」

宇宙3「頑張つてな！」

宇宙2「はい〜」

宇宙2、はける。モニターの前に集まるリーダーと宇宙3。

リーダー「しかし彼女は一体どんな作戦で……」

宇宙3「あ！ 人間と接触しましたよ！」

リーダー「反ゲジラ団体か……やはりどんな場所でも自分とは異なる者を毛嫌いする者は現れるのだな」

宇宙3「あ！ 反ゲジラ団体の本部……の隣に日高屋があります！ 100年後も健在か……！」

リーダー「あれは……代表の人にあることないこと言つてどんどんゲジラを悪い怪獣に仕立てあげているのか……やはり恐ろしい女だよ彼女は……」

宇宙3「あ！ 代表の人が……ダブル餃子定食を頼みましたよ！ 100年後も健在か……！」

リーダー「なるほど裁判か……ゲジラを訴え憎しみを与えると同時に、研究施設にも送り込もうというのか。確かにこれなら憎悪を膨れ上がらせることができるな」

宇宙3「ええ！？ もう大盛無料券配ってないの！？」

リーダー「日高屋詳しいね！？ 何？ さつきからお前、どうでも良いことばかりに目がいつ

てない？ お前自分の恋人のことは気にならないのか？

宇宙3 「はい！！」

リーダー 「めっちゃ良い返事」

宇宙3 「だって彼女のこと、信じてますから！！」

リーダー 「ただの良い彼女だった。まあしかし、確かに彼女なら安心か」

宇宙3 「はい！！ まずあのゲジラを訴える裁判にも、絶対勝ちますよ！！」

リーダー 「ああ」

モニターを見る2人。

リーダー 「……負けたな、裁判」

宇宙3 「負けましたね、裁判」

間

宇宙3 「あ！ ほら！ タイムマシンを使うみたいです！」

リーダー 「なるほど！ 過去に飛んで裁判をやり直すのか！ きちんと負けた時のことも考

えている！ できた部下だよ、彼女は！」

宇宙3 「リーダー。俺の、恋人です！」

リーダー 「ふうー！」

モニターを見る2人。

リーダー 「……奪われたな、タイムマシン」

宇宙3 「奪われましたね、タイムマシン」

リーダー 「しかもなんか奪ったやつ、ゲジラの誕生を止めるために100年前へ飛ぶって言う  
てたぞ……」

間

リーダー・宇宙3 「えー……」

リーダー 「もうめっちゃ失敗じゃーん。あいつめっちゃ失敗してるじゃーん」

宇宙3 「リーダー……部下の失敗は、上司の？」

リーダー 「責任じゃーん。そういうことになるのー？……分かったよ仕方ない。宇宙船に積んである簡易タイムマシンを使って私があの神山という男を止めてこよう。タイムマシンの準備を頼む」

宇宙3 「はい！！」

宇宙3、はけようとするがモニターを見て驚く。

宇宙3 「どわー！！」

リーダー 「どうした？」

宇宙3 「モ、モニターを見てください！ 地球が大変なことになってます！！」

2人、モニターを見る。

リーダー 「ど、どういうことだこれは……？」

宇宙3 「地球で巨大化した人間？ が……暴れている！！」

宇宙2 「あの人間は改造人間く横田研究員という者です」

宇宙2、入ってくる。

リーダー 「トモ子君……戻ったか。その横田という人物について聞く前に、まずは地球での失態について俺に言うべきことがあるだろう？」

宇宙2 「はい……部下の失敗は上司の」

リーダー 「責任じゃーん。でもキミも反省はしてー」

宇宙2 「地球での失敗はすみませんでした。ですなのでその代わりに横田という人物について詳しく調べてきました。これが資料です。 (資料をリーダーに渡す) 」

リーダー 「うむ、そういう仕事は早いな。流石だ」

宇宙2 「しかしこのままでは地球はこの横田によって滅ぼされてしまうでしょう」

宇宙3 「そんなにヤバいのか！ この改造人間！」

リーダー 「なるほど……全てはこの古澤という男の研究が原因ということか。分かった。それならば後は全てこの俺に任せろ……！ 俺がタイムマシンで100年前の宇宙ステーションへと飛び、事を上手く進められるよう恐そうな人間に化け、全てを解決してこよう……！！」

宇宙3 「リーダー……！ 恐そうな人間ってどんな感じですか？」

リーダー 「え？そりゃあお前…… (殺し屋の容姿を語る) 長身で、スキンヘッドで、声とかも洪くて……」

宇宙3 「声は、高い方が良くないんじゃないですか？」

リーダー 「なんでだよ」

宇宙3 「いえ。見た目恐くて声は高いと、サイコパスみたいでよりヤバくないですか？」

宇宙2 「確かに」

リーダー 「いやいやいや、そうかあ？」

宇宙3 「高い声にした方が良いですって。その場にいたら絶対俺もビビりますもん」

リーダー 「そうかな？……いやでも」

宇宙3 「高い声で」 殺す

リーダー 「うわ恐いな……いやいやいや」

徐々に暗転していく。

宇宙3 「高い声で」 殺す

リーダー 「うわ恐いな……いやいやいや」

宇宙2 「高い声で」 殺す

リーダー 「お前もやるのかよ」

良いところで完全暗転。

宇宙3 「高い声で」 ころ、ころコミック……」

リーダー 「どういうこと？」

【クライマックス】

明転。現代サイド③の後の宇宙ステーション。

研究員「それでは地球を滅ぼしたのは……!」

オペ子「暴走した……私？」

殺し屋「いや……正確には、そうではない」

4人「え？」

未来B「……それでは地球は誰の手で、」

研究員「その前に、そもそもあんたは一体誰なんだ？ なぜそこまで詳しい事情を知っている？ そろそろその正体を明かしたまえ！」

殺し屋「正体だと？ 馬鹿め……そこまで話す気は、」

オペ子、研究員にローをかます。

研究員「オペ子君……!」

殺し屋「……特別だぞ」

未来B「すぐ口割るなこいつ」

殺し屋「俺は……100年後の未来からやってきた、宇宙人だ！」

後ろにリーダーが現れ、ポーズをとった後はける。

研究員・未来B「宇宙人!？」

殺し屋「名前は玉ちゃんと言う。そしてこいつ（未来A）も、宇宙人だ」

後ろに宇宙3が現れ、ポーズをとった後はける。

研究員・未来B「こいつも!？」

未来A「み、未来のリーダーだったのか……! どうりでちょっとマヌケだと思った!」

殺し屋「お前にだけは言われたくないわ!」

オペ子「なるほどその雰囲気、嘘はついていないようですね。それでは玉ちゃんさん、これからあなたの詳細や本当の目的などを……全て吐いてください」

殺し屋「これ以上は……断る!」

オペ子、ファイティングポーズで殺し屋に近づく。徐々に弱明。

ここから舞台で現代サイドと未来サイドを同時に展開させる。未来サイドに照明。

弁護士「な、何ですかその超巨大改造人間とは!?」

助手「僕だってよく分からないけど！ ニュースでやってるから！（タブレットを見せる）」

ライ弁「そいつが暴れている場所って……この辺りではないですか！」  
弁護士「何ですってー!?」

暴走オペ子が現れ、舞台真ん中で暴れる。

リポーター『突如現れた謎の巨大改造人間！ 地球は一体どうなってしまうのでしょうか!?』  
か!? ……あ、戦闘機です！ 戦闘機がやってきました!』

そこに黒子が戦闘機を持って現れる。そしてオペ子に攻撃を始める。倒れる暴走オペ子。

戦闘機の人1『やったか……!?』

助手「あ……」

戦闘機の人2『この戦闘機は最新技術の結晶。これで倒せないなら嘘さ』

助手「えっと……」

戦闘機の人3『俺、帰ったら結婚するんだ』

助手「逃げてー!!」

暴走オペ子、立ち上がり戦闘機を全て破壊する。

助手「ほらー!!」

リポ『全滅です！ ちなみにコックピットの人達は瞬間脱出ポートを使用し全員無事です!』

助手「脱出の技術力は高いな！ よかったけども……でもあいつ超つえー!」

ゲジラ「あの改造人間、ここからでも分かる……! 体内エネルギーが尋常でない……!」

まともな兵器では歯が立ちませんよ……!」

弁護士「と、とりあえず私達も早く避難致しましょう……!」

ライ弁「そうですね」

弁護士、助手、ライ弁、はげようとするがその場から動かないゲジラ。

助手「どうしましたゲジラさん？ 早く避難しましょう!」

ゲジラ「……………」

弁護士「ゲジラさん……あなたまさか……………」

ゲジラ「しかし怪獣体の私も……超高エネルギー生命体です」

弁護士「いいいけません！ いけませんよ！ あんな得体の知れない者と戦うつもりですか！？」

ゲジラ「おそらくあの改造人間は……私にしか止められません……………」

弁護士「……あなたは先ほど法廷で、もう地上では暴れないと宣言したばかりですよ？そんなすぐに宣言を破るような人を、私はもう弁護できませんからね！？」

ゲジラ「國部さん。私は今回のこの裁判で、あなたや弟さん、そして署名をくれたたくさんの人々に助けて頂きました。だから今度は……私があなた達人間を助けます！」

助手「ゲジラさん……………」

ゲジラ「私に……恩返しをさせてください」

弁護士「……決心は、堅いようですね。……しかし！ あなたは法廷での宣言を破って暴れに行くのです。必ずもう一度裁かれなければなりません！ ですので必ず……………」

あの改造人間に勝って、裁かれに戻ってきてくださいよ……………」

ゲジラ「はい。その時はまた……弁護をお願いします！」

ゲジラ、はける。はけた方向を向いて仁王立ちをしている弁護士。

助手「姉さん、避難しないの？」

弁護士「……少しでも近くでゲジラさんの戦いを見ておきたいのです。弁護人として、証人として。この後の裁判を少しでも有利にするため、仕方なくですよ」

助手「姉さん…………」。僕は、避難するけど」

ライ弁「私も」

助手とライ弁、はけようとする。

弁護士「あなた達……………いなさい！！」

助手・ライ弁「……………え？」

弁護士「いなさい！！」

助手・ライ弁「ええ……………」

現代サイドに照明。

殺し屋「ふっ……………拷問はそれで終わりか？」

オペ子「……………そうですね、終わりにしましょう。全部、吐いてくれましたし」



研究員「結局全部話したなあいつ……」

未来A「リーダー……！ だせえ！」

研究員「しかしなるほど、あなた達の星では皆非戦闘主義なのか。だからあんなに暴力的行為に抵抗感があつたのだな」

未来B「しかし……暴力的行為をしない代わりに、人を、心を陥れるという行為については何も抵抗感がないようだな……！」

研究員「神山さん……」

未来B「ゲジラに、人への憎しみを与えるために私を利用しやがって！ゲジラを訴えるのにどれ程私が尽力したと思っている！」

殺し屋「待て待て。そもそもお前は反ゲジラ団体を作るくらいだ。元々ゲジラに対する憎しみはあつたのだろうか？」

未来B「そうだとしても……！ ここまでゲジラへの憎しみが大きくなったのはお前らのせいだろ！ あることないことぬかして私の心を弄びやがって！」

殺し屋「まあそれに関しては私の部下も少々やり過ぎた。まさかゲジラの存在自体を消しにくるとは。お前達の星では歴史改編は重罪なのであろう？」

未来B「それでも家族を守るためだったら私は、待て……それは娘は……？ 私の娘はどうなる！？」

殺し屋「確かにお前の娘は一度ゲジラの被害を受けている。しかし人間への憎悪が薄いゲジラの毒などすぐに消える。残念ながらお前の子供の体が悪いこととゲジラとはもう何の関係もない。ゲジラが消えることで解決できる問題ではなかったのだ」

未来B「ふざけるな！！」

殺し屋「お前は初めから何か別のものにすがりたかっただけだ！ 家族の不幸を！」

未来B「……なんだと……？」

殺し屋「確かに我々のやり方はよくなかった。しかしお前ももっと、自分の子供を守るために、視野を広げるべきだったのではないのか？」

未来B「……くそっ！ 私はこれから……どうすれば良いのだ……！」

研究員「まあ……ゲジラのこととはよく分からないが、そのゲジラが地球を守るために暴走した横田君と戦ってくれるのだろうか？ 良いやつではないのか？」

未来B「そんな簡単に、すぐに……割り切れるものではない……！」

未来サイド。真ん中から映像と共に怪獣化したゲジラが出てくる。そして暴走するオペ子と接触する。

助手「す、すげえ！ やっぱり怪獣体はすごい迫力だぜ！」

弁護士「頑張ってください……！ ゲジラさん……！」

初めは迫力ある雰囲気で見つめ合うゲジラと暴走オペ子だったが、とりあえず初対面の暴走オペ子にお辞儀をして誠意をみせるゲジラ。

助手「やっぱり怪獣体でも律儀だあの人！」

そんな恐縮するゲジラをいきなり殴る暴走オペ子。

助手「あっちは外道だ！」

それをきっかけに、とうとうゲジラVS暴走オペ子の戦いが始まる。  
現代サイド。

殺し屋「そう、確かにゲジラは地球を守るために戦う。しかし……それがいけなかった」  
研究員「何？ どういうことだ？」

殺し屋「2人の戦いはほぼ互角だった。しかし横田の体には自動再生機能もついていた。ちよっとしたゲジラの攻撃ですぐに再生されてしまったのだ。そんな彼女を止めるためには、核となるエネルギーを破壊するしかなかった」

研究員「いやしかしその核こそ超高エネルギー体だろう？ 破壊しうる衝撃を与えれば大爆発を起こし、それこそ地球を滅亡させる程の被害を与えてしまうのでは？」

殺し屋「その通りだ。それでは彼女の核をどうすれば良いのか？ ゲジラは必死に考えた」

未来サイド。照明戻る。倒れている暴走オペ子が立ち上がる。

助手「あの改造人間、いくら倒しても立ち上がってくるよ！」

弁護士「ゲジラさん……！」

『ググググ……！』と地鳴りのような大きな音が鳴る。

弁護士「な、なんの音です……！？ ゲジラさん……！」

恥ずかしそうにお腹を押さえるゲジラ。

助手「いや腹の音かい！ こんな状況でお腹減ったの！？ ゲジラさん」  
ライ弁「いえあんな激しい戦いを続けているのです。エネルギーの消耗も激しいでしょう」

現代サイド。

殺し屋「そんなゲジラの頭に1つの閃きが駆け巡った！ まさに天啓！」

研究員「一体それは……！？」

殺し屋「お腹減ったし、核エネルギー食べちゃえばよくない？」と

研究員「何そのちよつとマヌケな閃き」

殺し屋「そしてゲジラは彼女の核を丸ごと食べ、そのエネルギーを自分の体内エネルギーと

融合しようと試みた」

ゲジラ、フラフラと暴走オペ子に近づく。

殺し屋「しかし核は超高エネルギー体。ゲジラはそれを体内でうまく融合できず、エネルギー

ーは次第に膨れ上がり、ついにはゲジラ自身が暴走を始めてしまった」

研究員「それでは地球はその暴走したゲジラに……！」

殺し屋「そう、滅ぼされたのだ……！」

ゲジラ、暴走オペ子の核を奪い取る。

未来A「えー！ だったらゲジラに核を食べさせないようにしないと！」

オペ子「しかしどうやって？」

研究員「我、解決法見つけたり」

未来A「早い！ 流石天才！」

研究員「しかしそれは非人道的な方法……！ やはり私はマッドサイエンティストなのか

……！」

未来A「一体それは……？」

研究員「核エネルギーの味を、うんこ味にする」

未来A「狂ってやがるぜ……！」

未来サイド。核を食べようとするゲジラの口が止まり、めっちゃ嫌そうに鼻をつまむ。

現代サイド。

研究員「しかしこれで地球は、救われたな」

未来A「ああ」

殺し屋「そんな訳あるか！ そもそも彼女の核が無事なら無事で、倒すすべのないゲジラは

そのままやられ、今度はやはり彼女の手によって地球は滅ぼされてしまうだろう」

研究員「それは……」

殺し屋「お前も本当は理解しているだろう？ 未来の地球を救う道は……古澤研究員、お前

が彼女を蘇らせる研究を放棄するか、お前自身の存在が消えるしか、ないのだよ……！！」

「研究員「私は……狂った科学者かもしれないが、悪人ではない。ましては地球を滅ぼしたいとも思わない。しかしだ……！ やはり……このまま黙って横田君の死を受け入れられる程、できた人間でもないのだ……！」

オペ子「主任……」

殺し屋「それではどうすると言うのだ？ 未来の地球も救ってお前達2人ともが幸せになる！ そんな全部まるっと解決させる方法があると言っても言うのか！？ あるのなら言ってみろ……何か案があるのなら言ってみろ！」

未来A「はい！！」

全員、未来Aを見る。

殺し屋「……何か案があるのなら言ってみろ！（研究員に）」

未来A「いや無視しないでください！ 俺の案聞いてくださいよ！ ようは暴走する未来の横田を止めれば良いんでしょう！？」

殺し屋「いやだからそのために今この人（研究員）に研究をやめろと、」

未来A「そうじゃなくて！ 今のあんたが暴走する横田を止めてくれれば良いんだよ！ 100年後の未来に飛んでね！」

殺し屋「……何？」

研究員「なるほど……！ あなた達が乗ってきたタイムマシンを使って私が未来に行くというのか……！ しかし、未来の私が施した横田君を今の私が、」

オペ子「それは心配ないでしょう。だって主任は……天才ですから」

研究員「……そうか……そうだな。……良いだろう！ その案に乗ろう！ しかし条件がある。未来の「たご」たごが落ち着いたら、未来の技術で研究された横田君の病気の特効薬を持ってこの時代に帰ってきたい。……できるか？」

殺し屋「駄目だ」

研究員「何？」

殺し屋「問題が多すぎるのだ。そもそも俺が載ってきたタイムマシンでは駄目だ。タイムマシンは万能ではない。消費エネルギーを抑えるため、乗ってきた時代・時間にしか戻れないように設定されている。俺のマシンではすでに地球が滅亡した未来にか戻ることができない。使うのであれば、彼（未来人B）が乗ってきたマシンだ。うまくいけばゲジラと横田がちょうど戦っている時間に戻ることができるだろう」

未来B「……」

殺し屋「しかし未来の地球では、過去の人間を未来に連れていくことは重罪。さらにお前の要望、未来の薬、つまり未来の技術を過去に持ち込ませることも重罪だ。問題が多

すぎる」

未来B「……しかしこいつを未来に連れていかなければ、我々の時代で地球は滅びてしまうのだろう？」

殺し屋「何？ お前まさか……？」

未来B「オーケイ、良いだろう。私の乗ってきたタイムマシンでお前を未来に連れていってやる」

研究員「本当か！？ 良いのか!?!」

未来B「ああ。私はただ、家族を守りたいだけだ。そのためなら私はなんだってやる。私にとっては問題がゲジラから横田殿に変わっただけだ。今更罪の1つや2つ、どうってことはない」

研究員「ありがとう……!」

殺し屋「……決まったな。しかし覚悟しておけ。未遂とはいえお前も歴史改編の罪を犯しているのだ。世界を救ったとしても、必ず2人ともその時代で裁判にかけられるぞ」

未来B「問題ない、良い弁護士を知っている。2組もな」

殺し屋「そうか……ならばキミ達にゲジラの体内構造の資料を渡しておこう。何かの役に立つかもしれない。すまんが一旦縄を解いてもらえるか？」

オペ子、殺し屋の縄を解く。殺し屋、資料を研究員に渡す。

未来A「リーダーはどうするの？」

殺し屋「俺は自分の乗ってきたタイムマシンで少し先の未来に帰っているよ。キミ達が横田を止めることができれば私の戻る未来も変わっているはずだ。俺はキミ達の成功を……信じているよ」

殺し屋、はけようとする。

オペ子「あれ？ なんか侵略のこととかあやふやにされてませんか？」

研究員「確かに！ あいつそれっぽいこと言ってるだけだぞ！」

殺し屋「やべ！ バレた！」

走り出す殺し屋。その後を追う未来A。

未来A「あ！ 俺も！ 待ってください未来のリーダー！」

オペ子「あ！」

未来B「……まあ放っておこう。我々は未来の地球を救うことに集中するぞ」

研究員「……そうだな。横田君、すまんがキミにはここで彼からもらったプログラムを使い

隕石の完全破壊を頼みたい。一先ずこれが成功しないことには未来も何もないからな」

オペ子「ええ、任せてください。その代わりに主任、必ず未来から、」

研究員「分かっている。何があってもキミを助ける薬は、届けるよ」

オペ子「それを、必ず主任が持って帰ってきてくださいよ」

研究員「……そうだな」

現代サイドの人物が一旦全員はけ、その後研究員、未来Bが出てくる。

研究員「ここがタイムマシンの中か……!!」

未来B「(周りをかちゃかやしなから) 向こうに到着する時間と場所は、私が過去へ飛んだ時間と場所から多少のズレが生じる。そのズレを上手く調整できれば、ゲジラと横田殿が戦っているところに到着できるはずだ……出発!」

すごい変なSEが流れる。

研究員「え? 何々この音? 故障?」

未来B「これが時空移動の音だ」

研究員「これが!? 想像したやつと全然違う!」

その後タイムマシンを持った黒子がゲジラと暴走オペ子が戦っている場に出ている。

未来B「よし! 時間も場所もピッタリだ!」

研究員「ここが未来……そしてあれが暴走している横田君か……! 必ず私がキミを、」

何かを決心したゲジラ。

未来B「待て……ゲジラの様子が変だ」

研究員「何?」

ゲジラ「私が……地球を救うんだ……!!」

研究員「まさか……!!」

ゲジラ「そのためにいいいい!!! 何でも喰ってやらあああ!!!」

ゲジラ、暴走オペ子の核を喰べてしまう。

研究員・未来B「あぁー！ー！！！」  
未来B「くそ！ 出てくる時間が遅かったか！」

ゲジラ、激しく悶える。ゲジラ、ピタッと止まる。激しく暴れる。ピタッと止まる。激しく暴れる、を繰り返す。なんか踊っているように見える。

未来B「な、なんだあの動きは？ ふざけているのか？ 踊り……？」

研究員「おそらく、核エネルギーを体内で融合しようと必死に悶えているのだろう。しかしいつまでその理性を保つことができるか……！」

未来B「くそ……！ ゲジラの暴走をなんとか食い止めなければ……！」

研究員「その前にすまんが一旦、核エネルギーがなくなり人間サイズに戻った横田君を避難させたい……！」

研究員、未来B、タイムマシンを持った黒子、一旦はける。その後下手からオペ子を抱えて出てくる研究員と未来B。研究員、オペ子を地面に寝かせる。

未来B「……ある程度の距離は取ったが」

研究員「離れすぎる訳にもいかんだろう」

真ん中から弁護士、助手、ライ弁が出てくる。

助手「急に踊り始めてどうしたんだろうゲジラさん……」

ライ弁・未来B「あ！」

ライ弁「神山さん……！ 過去から戻ってきたのですか……！？」

未来B「荒原弁護士……！」

ライ弁「ゲジラさんがいるということは、存在を消すことには失敗したようですね……しかしそれであなたがしようとしたことが、」

未来B「本当に申し訳なかった！（頭を深々と下げる）」

ライ弁「何……？」

未来B「許してもらえらるとは、思っていない……！ しかし今は、」

ライ弁「何か……また事情があると言うのですね。ふう……神山さん、頭を上げてくださ  
い」

未来B「（頭を上げながら）荒原殿……！」

ライ弁、未来Bを殴る。

弁護士「ええー!?」

ライ弁「一先ずは、これで。それでは現在の状況を、説明してください」  
未来B「ありがとう……荒原殿」

助手「……かっこいい」

頷く研究員。男どもの反応に戸惑う弁護士。

弁護士「ええ……? わ、分からん……」

ゲジラサイドに照明。ゲジラ、止まる↓激しく暴れる、をまだ繰り返しているが次第に動きが弱くなり最終的にうずくまってしまう。

弁護士サイドに照明。

ライ弁「なるほど……大体は理解できました」

助手「まさかゲジラさんが暴走しちゃうなんて……!」

弁護士「ではあなたはそれを止めるために過去から戻ってきた、と」

未来B「正確には横田殿の暴走だが……今となってはその通りだな」

弁護士「そしてこの人は天才科学者、だけど倫理観も恋愛観も狂っている気持ち悪い変態野郎だ、と」

研究員「あれ? 今の説明でそんな風に捉えられた私?」

頷く弁護士、助手、ライ弁、未来B。

助手「でも今ゲジラさん、落ち着いてるよね? もう安全なんじゃないの?」

研究員「いや、寧ろあの状態は危険だ。嵐の前の静けさ……暴走まで残り僅かだろう」

助手「そんな……!」

弁護士「……ゲジラさんを救う手段は、何かないのでしょうか?」

研究員「……1つだけある」

皆「おお!」

助手「流石天才科学者!」

弁護士「それで、その方法とは?」

研究員「その方法とは……! この場所からゲジラをめっちゃ応援する! 頑張れとかもうめっちゃ励ますんだ!」

間



助手「何言ってるんだお前？」

弁護士「ふざけているのですか？」

研究員「違う！ 話を最後まで聞け！ 受け取った資料によると、ゲジラの力や性質は心、感情に大きく影響される」

未来B「そうみたいだな。心の有り方により人間にとって善にも悪にもなり得る存在」

研究員「先ほどまでゲジラは自分の理性、つまり心を使って膨大なエネルギーを抑え込もうとしていた。しかし心だつて消耗品。抑え込む前に尽きてしまい、今のあの状態だ。だから我々はその心を再び燃え上がらせる！ ゲジラを応援、励まし続け、感情に、心に火を灯し！ 感情を再び爆発させ！ エネルギーをコントロールさせるんだ！」

ライ弁「なるほど……確かにそのように聞けば説得力はありますね」

助手「でもどうやって？ 僕たちの声なんてここからじゃ絶対届かないよ？」

研究員「分かっている。だからここで眠っている横田君に、協力してもらおう」

皆「え？」

研究員「横田君は未来の私が改造した高性能アンドロイド。当然拡声器機能や飛行機能もついている」

弁護士「いや拡声器機能はなぜ？」

未来B「理由は聞かない方が良い……」

研究員「横田君をゲジラの顔ギリギリまで飛行させ、拡声器機能を使いこの場所からゲジラに我々の言葉を投げかけるんだ。しかし1つ問題がある。眠っている横田君を再起動させるには高エネルギーを注入しなければならないのだが、どう用意するか……」

ライ弁「それなら弟君、あなたの持つ転送装置で何か高エネルギーの物体をここに転送させることはできませんか？」

助手「いやさっきの裁判でも説明したけど、この転送装置は感情に反応させて色々な物体を転送させるマシンなんだ。しかも転送先の相手とは使用者と面識がなくちゃならない。そんな都合よく高エネルギーの物体を持っていて、感情が常に豊かで、しかも僕たちと面識のある人なんている訳ないよ」

弁護士「高エネルギーの物体で感情が豊かで私達と面識のある者……いるじゃないですか  
1人、いや……1体」

助手「え？……あ。……転送、開始」

転送のSE。真ん中からタンクトップでそばを食べているロボ裁判官が出てくる。

裁判官「え！？ 何々！？ 急に変な所に転送されたけど！？」

未来B「デルタ型ヤマダ32号！ ポンコツの方か！」

ライ弁「すごい庶民感出していますね」

裁判官「誰がポンコツだ！ それ以上は法廷侮辱罪としますよ！」

助手「いやもうここ法廷ですらないから！」

裁判官「一体何なんですか！？ ワタクシをこんなところに呼び出して！」

弁護士「地球を救うためです……！ どうかご容赦を……！」

裁判官にじりじりと近づく弁護士達。

裁判官「え？ 何々？ めっちゃ恐いんですけど？」

裁判官を取り押さえる弁護士達。

弁護士「今です！ このロボットからエネルギーを取り出してください！」

研究員、裁判官にプラグを差しオペ子にエネルギーを転送する。

裁判官「ぬわああああ……！（倒れる）」

研究員「すみません、ことが終わったらすぐにエネルギーをお返しするので。しかしこれで、後は起動させるだけだ」

研究員、オペ子を起動させる。起き上がるオペ子。

助手「やった！」

研究員「では横田君！ あの巨大怪獣の頭上まで接近を！」

オペ子「承知しました」

オペ子、黒子に抱えられ宙に浮きながらはけようとする。

助手「なんか飛び方不安定じゃない？」

研究員「ここからはけたら安定するはずだ！」

オペ子のはけた後、真ん中から小さいオペ子を持った黒子が出てきて、ゲジラの頭上まで接近する。

研究員「この装置に声をかければゲジラにその声が届くはず。あとは……よろしく頼む」

助手「……ゲジラさん聞こえますか！？ 僕です！ 憲です！ あと少しでエネルギー

を抑えられるはずですよ！ だからあともう一踏ん張り……頑張ってください……  
……ほら、姉さんも！」

弁護士「ゲジラさん！……あの、えっと……今、ツライですよね！？……ですあの、ツライ時は……ツライ時は！ エロイことを考えるんです！」

吹き出すゲジラ。

助手「姉さん？」

弁護士「すみません、何を言ったら良いのか分からなくなり……しかし実際に効果あるんですよ。私も裁判等でツライ時、エロイことを考えますし」

助手「聞きたくなかった！ 姉のそういう話！」

クスクスと笑うゲジラ。

研究員「……この調子だ」

ライ弁「あんなので良いのですか？」

研究員「案外ああい親しい者の馬鹿話で元気が出るものだよ。しかしまだまだ足りない。

もっとゲジラの感情を爆発、揺さぶらなければ」

ライ弁「それでは私も。……ゲジラさん、私です。原告側の弁護士です。ゲジラさんはこの私から勝訴したのです。たかがエネルギーなんかには負けることは許しませんよ。絶対

対に、勝ってください」

ゲジラ「うるせえ！」

ライ弁「なんで！？」

弁護士「そりや裁判で嫌われているからですよあなたは！ もう喋らないでください！」

ライ弁「えー……」

研究員「いやしかし声が出た。少しだが感情が揺れ動いたぞ。この調子でもっと声を、溜まっていることを吐き出させよう！」

弁護士「そういうことならゲジラさん！ 今までの鬱憤を晴らしましょうよ！ この性悪

弁護士に言いたいこと言っちゃってください！」

ライ弁「え？」

ゲジラ「……お、ま、え……！ 散々法廷で悪口言いやがってー！ このクソ野郎ー！」

弁護士「そうです！ その調子ですゲジラさん！」

助手「あなた（ライ弁）は我慢してよ〜」

ライ弁「ふん……（うつむく）」

ゲジラ「あんな余裕ぶって結局裁判負けるくせによー！ だせー！ お前のそのなんか紳士ぶってる喋り方も振る舞いも、全部うざいしだせえー！ お前はクソでださ

いんじやー!!」

ライ弁 「(キツと正面を向く) ……ひーん(泣く)」

助手 「泣いたー!!」

ライ弁 「自分の悪口を言われるのは苦手なのです、ナルシストなので」

助手 「知らないよ」

ライ弁 「どうかね、私はあくまで神山さんの弁護人ですから! 残りは神山さんにどうぞ」

未来B 「ええ!?」

弁護士 「では次は神山さんです! ゲジラさん!」

ゲジラ 「よしきたー!!」

未来B 「ちよ、ちよっと」

ゲジラ 「神山ー! そもそもお前が訴えてきたからこんなことになったんだ! 何が反ゲ

ジラ団体だ! そんなことしてる暇があったらもつと家族を大切にしろー!!」

未来B 「な……」

弁護士 「そうだそうだー!」

ライ弁 「(未来Bの肩に手を置き) あなたは我慢する必要はありません。ゲジラさんを、も

つと知ってきてください」

未来B 「……ゲ、ゲジラー! 私はあ! その家族を、娘の体を良くするためにやって

たんだよー!!」

ゲジラ 「はああ!? 馬鹿か! それなら私を追放したって解決しないだろうがよおー!」

未来B 「もう分かってる! そもそも私だって、変な宇宙人に騙されてたんだー!」

ゲジラ 「被害者面してんじやねー! 皆誰しも何かの被害者なんだよおー!」

未来B 「そうだよ! 俺もお前も被害者だ! 上手いこと言うじゃねえか! 怪獣なのに

なんでそんなに人語を喋れるんだよー!」

ゲジラ 「うるせー! 人が好きだから一生懸命覚えたんだろうがー! バカーー!! 私

はなあ! 優しい怪獣なんだよおー!!」

未来B 「だからもう分かっているわー!! バカヤロウー!!」

弁護士 「ふふ……」

助手 「ああ、ああ、これ……」

研究員 「ああ……これで良い。……と言いたところだがこのままだと、」

全員、3連続で一斉にくしゃみをする。

研究員 「やはり……! ゲジラが大声をあげ続けたことで、(くしゃみ) ここまで息が届い

たか……!」

助手 「ゲジラさんの息……(くしゃみ) 花粉症と同じやつか!」

弁護士 「何を言っているのですか憲さん……(くしゃみ) 花粉症の方が、よほどツライです

ね！ ですのでまだまだ、（くしゃみ）好きなだけ吐き出してください！ ゲジラさん！」

くしゃみと涙を流しながらゲジラに声を届け続ける弁護士達。その様子をサイレントで演じる。

最後にゲジラが『ゴオアアアア！！』と大きな咆哮をあげる。いつの間にか弁護士達のくしゃみと涙が止まっている。

ライ弁「くしゃみが……」

助手「涙も……」

研究員「核エネルギーが無事に……ゲジラの体内で融合されたようだ。そして自分の感情を爆発させたことで、心も完全に洗われたのだな。残りの毒素も払われた今、もう息を吐いても人間に害を為すことはない。これからは本当の意味で、環境にも人間にも優しい存在だ」

顔を見合わせる弁護士達。そして弁護士と助手はハイタッチを、ライ弁と未来Bは握手をする。

徐々に暗転していく。

【エピソード】

助手「こうして、過去と未来を巻き込んだ大事件は一先ず幕を閉じました」

明転。

軽快で明るい BGM が流れる。

助手「地上で暴れてしまったゲジラさん、歴史改編を行おうとした神山さん、過去からやってきた古澤さんの3人は、やっぱり裁判にかけられてしまいました」

研究員、ゲジラ、未来B、丸めた紙を持っている。

助手「しかし3人とも見事勝訴！」

3人、紙を広げると『勝訴』と書かれている。

助手「3人とも、世界を救ったっていう功績が勝訴の大きな決め手となったみたいです。でも一番の決め手はやっぱり、僕たちが弁護したってことだけだね」

弁護士とライ弁がドヤ顔をしている。

助手「その後古澤さんは無事100年前に帰ることができました。勿論横田さんの病気を治す薬を、持ってね」

抱き合う研究員とオペ子。

助手「そして反ゲジラ団体はそのままボランティア団体になりました。なんとゲジラさんもその団体に活動しています。そして、神山さんの娘さんも」

仲良く活動するゲジラと未来B。

助手「まあとにかく色々大変だったけど……僕たちは、」

裁判官「未来を手に入れたのだ！」

助手「お前が言うんかい！」

裁判官「ヒヤッハー！ ハッピーエンド！」

(宇宙人1〜3以外の)登場人物達が全員出てきて、BGMに合わせてどんちゃん騒ぎをする。徐々に暗転していく。

リーダー「ちよちよちよちよちよちよちよ！」

リーダーが真ん中から出てくる。明転。

リーダー「ちょっと待ってちょっと待って！」

静まる場。

間

再び盛り上がる。

リーダー「いやなんでだよ！ ちょっと待ってって言ってるだろうが！」

研究員「何かね？ 今エンディング中なんだけど？」

リーダー「何エンディングって？ というかなんでお前がこの時代にいるんだよ？ お前は100年前に帰ったんだらう？」

オペ子「……ごちゃごちゃうるせーなあ！？」

エンディングだから出てきてんだらうが

よ！」

リーダー「だから何エンディングって？」

研究員「私達はあれだよ。あの2人の、子孫なんだよ」

オペ子「……ひいひいひい孫とかじゃねえの！？」

リーダー「……そうですか。でもこいつら(殺し屋と未来A)がいるのはおかしいだらう！ この人俺と部下が化した地球人の姿だからね？ 本人ここににいるのに、この人がい

るのは意味が分からないから！」

殺し屋？ 「いや自分、近所で絵本描いてるオハラという者ですけど」

未来A？ 「僕は、そのアシスタントです」

リーダー「あ……そういう、逃げ道のあれで……失礼しました」

殺し屋？ 「いえいえ」

未来A？ 「じゃあ、お帰りはあちらなんです」

リーダー「はい(帰ろうとする)……じゃなくて！ 俺はやることがあつてここに来たの！」

皆「ええ？」

リーダー「俺はこの時代から更に50年後の未来からやってきた玉ちゃんだ。確かにキミ達の

おかげで地球は救われた。しかしその出来事のせいで、ゲジラが更に強くなつてし

まったせいで、未来の宇宙は甚大な被害を受けている！ 悪の組織に利用された

ゲジラが宇宙で再び暴走するのだ！」

皆「ええ！？」

リーダー「そういう訳でだ……残念だがこの時代のゲジラを消しにきた！」

皆「なにー！？」

裁判官「だったらその悪の組織を潰せー！」

リーダー「それもやっている！　しかし再び暴走するリスクのあるゲジラも放ってはおけないのだ！」

裁判官「暴走する？（ゲジラに）」

ゲジラ「しないっす」

裁判官「ね？」

リーダー「信用できるかそんなの！」

宇宙2「ちよっと待った〜」

今度は宇宙2が真ん中から出てくる。

リーダー「良いところにきてくれたトモ子君！　キミも手伝って、」

宇宙2「違います〜。私はリーダーを止めに来たんです〜」

リーダー「え？」

宇宙2「私はこの時代の更に100年後からやってきたトモ子です〜。50年後一度は宇宙を脅かすゲジラですが100年後に現れる超宇宙皇帝と戦うためにゲジラのは必要になるのです〜」

リーダー「超宇宙皇帝……？」

裁判官「スーパーコスモエンペラー……！」

助手「なんで英語にしたの？」

ゲジラ「どうか私未来でそんなのと戦わないといけないの？」

宇宙2「とにかく〜ゲジラは守りますよ〜」

宇宙3「待てー！ーい！ー！！！」

更に宇宙3が真ん中から出てくる。

宇宙3「遊びにきたー！！」

リーダー「帰れ」

宇宙3「それだけではない！　俺はこの時代の200年後からやってきた！　ゲジラの存在を守ろうとするトモ子！　キミを止めるために！」

宇宙2「なに〜？」

未来B「なんかまたこの前みたいな流れになってるー！」



OPBGM が流れる。皆でわちゃわちゃする。

リーダー 「よし！ ならばお前（宇宙3）は俺の味方だな！」

宇宙2 「いえいえくラエル君は私の味方だよね？」

リーダー 「なんでだよ！」

宇宙3 「どうしよう……！」

リーダー 「迷うなよ！」

裁判官 「ワタクシたちはゲジラを守れー！」

更にわちゃわちゃする。徐々に暗転していく。

弁護士 「ほらね……やっぱり不毛なんですよ、過去を変えるなんて。どこかで変えればどこかで影響を受けるんですから。歴史改編なんてキリがない、碌なもんじゃないんですよー！」

完全暗転。

(終)